

「御用絵師」

森本ジユンジ

(人物)		
長谷川等伯(信春)		
狩野永徳		
日通上人		
長谷川浄 <small>きよ</small>		
長谷川久蔵		
狩野松栄		
千利休(千宗易)		
〔複数役〕		
奥村宗道(実父)	敦盛面(織田信長)	介錯人
長谷川道浄(養父)	老僧	
妙宗(養母)		
狩野元信	翁面(豊臣秀吉)	
長谷川又四郎	天正少年使節団1	
狩野源四郎	天正少年使節団2	童子面(鶴松)
幼少期の久蔵	天正少年使節団3	
教行院小坊主	天正少年使節団4	
長谷川宗宅	長谷川家の手代1	
宗也	長谷川家の手代2	
左近	長谷川家の手代3	
狩野派の弟子達		
長谷川派の弟子達		
妙国寺の坊主		
浄の父	安土普請奉行	
浄の母		
浄の親戚達		
長谷川家番頭	京都所司代	
宣教師(ヴァリニャーノ)		
通詞(ルイス・フロイト)		
船頭		
兵達		
洛中の人々(遊女、町衆、町人)		
その他		

(装置)

装置を排したオープンステージ。

天上から地まで立つ、複数枚の白地パネル。(移動可能)

パネルは映像スクリーンとなる。

舞台奥に高座が置かれる。(移動可能)

高座に橋掛かりの役目を果たす通路

※衣装は、着物、鬘まげに限らず。和のテイストを残したMODEならば尚良しとする。

(プロローグ)

崩壊の音、鳴り響く。

舞台上に並んだ、複数の大パネル。

その画面に光輝く障壁画。

「楓図」浮かび上がる。

その絵を見つめる男。

長谷川等伯。

傍らに日通上人の姿。

等伯 「還ってきた：すべて自分の元に。

これまで生んだ業の深さ：罪：毒が。

すべて自分に」

日通 「いつかこういう日が来ることを、

随分前から分かっていたような気がする。

私は忠告すべきだった。ずっと傍にいた者として」

等伯 「心の闇に背中を押され弓弾いた矢が、

結局はこの胸をめぐり取って行った」

日通 「長年の願いが成就し、ようやく一門が世に出たというのに。

長谷川等伯。今や都でそなたの絵を知らぬ者はおらんだろう」

等伯 「しかし、それで何が残った：。

たった一人の男にとられた人生。

嫉妬と野心であの男の影を追い求めた。

狩野永徳。

ワシにとつてあの男は、あまりに大きな存在」

日通 「生まれながら世の誉れを一身に受け、いつも目の前に立ちふさがった」

等伯 「あの男を越えたかった。あの男の座を奪いたかった」

日通 「そして、最も大切なものを失った」

等伯 「そうだ：。

人の道を外れ、阿鼻の世界へ行き着いたこの身は、今や無残な抜け殻。

夢にまで見たこの絵を描き上げても、今となってはさもしく映るだけ」

日通 「誰がこの見事な絵の裏側に、そのような苦悩を見い出せるか」

等伯 「零れ落ちていく：この手から最も愛しいものが。

日通殿、これが御仏の天罰か。

ここまで責め苦をする地獄がどこにある」

日通 「御仏は絶えず智慧の光を照らす。今はただ、無明の苦しみと知ること」

等伯 「この金碧の輝き。ワシは今まで何を望んで来たのか：。

忘れたはずの過去が蘇り、堂々を巡る。

いつからか、自分の求める道に狂いが生じていたのは」

日通 「この絵にたどり着くまで、すべては長い道のり」

等伯 「そう、長くて遠い」

日通 「あまりにも多くのことが通り過ぎて行った」

等伯 「ワシは一体、何を求めて…何を」
日通 「そもその始まりは」
等伯 「能登、七尾。あの日の朝霧」

照明、CHANGE。

静かな波音、IN。

等伯と日通、退場。

パネル、「楓凶」消えて移動。

(能登地方 七尾)

朝霧。

奥村宗道、戦支度で登場。

その後ろに又四郎(幼少の等伯)がついてくる。

宗道、海を見つめる。

又四郎、寄り添う。

宗道 「寒いか」

又四郎 「いいえ。父上」

宗道 「無理をするな」

又四郎 「真にございます。武士はいかなる時も冴えたる眼で世を見通す。

又四郎は、いつもその教えを守って」

宗道 「いくつになつた」

又四郎 「十でございます」

宗道 「お前には、この初春^{はる}、母を亡くして寂しい思いをさせた」

又四郎 「ちつとも。兄上達が気にかけて下さり、そんな風に思ったことなど」

宗道 「戦だ、又四郎。能登はこれよりまた荒れる。」

我らの大殿が長年築き上げたこの七尾の地を、皆、こぞって奪いたがる」

又四郎 「私も早う元服を迎え、兄上達と一緒に戦いとうございます」

宗道 「いや、武家の習わしは様々。戦ばかりが武士というわけでは」

又四郎 「私はもう一人で鎧もつけられます」

宗道 「我が家のような禄の低い武士に家督も何も無いが、

此度、嫡男に奥村家を継がせ、下の兄は家臣として引き連れる。

ただ、そうなると、ここに残るのはお前一人」

又四郎 「私は平気。立派に留守を守ります」

宗道 「戦火が町に及ぶやも」

又四郎 「その時は私も槍や刀を持って！」

宗道 「よう言うた。しかしな、家にはまともな武具もない。

お前も知っての通り、我が家はこれまで実に貧しい暮らし。

病の母へ、葉すらまともにやれなんだ。

ワシは家の者を、これ以上苦しめとうはない」

又四郎 「私にそのようなお氣遣い」

宗道 「又四郎、お前はこれより奥村の家を出る」

又四郎 「父上！」

宗道 「初めは仏門に入り、帰依することも考えたが、

何よりお前は絵の才、秀でたる。それをするには忍びない」

又四郎 「お待ちください、私は」

宗道 「武士のたしなみの一つと、幼い頃より絵筆を取らせてみたが、

初めて見た時、息を呑んだ。

今やこの辺りで、お前ほどの腕前を持つ者は」

又四郎 「嫌です！私は奥村の家を出ることなど」

宗道 「あれこれ考えを巡らせた末、叔父の文次に相談を」

又四郎 「文次。あの叔父上は反物を扱う商人ではございませんか」

宗道 「あれも元は歴とした我が一族。

お前と同じく上の兄があつた故、家を出たが、

今や能登一帯に商いを拡げるまでに。

叩き上げて人を見る目は確か、何よりお前の絵のことを承知している。

あの男が見立てた人物なら間違いはない」

又四郎 「行きません！私は絶対」

宗道 「長谷川道浄を知ってるな。七尾でも名の通った染め物商家。

絵つけの才にかけては当代、抜きん出たる。

聞けばあの男、前々からお前の絵に感心しておったという」

又四郎 「そんな…それなら私は、金輪際、絵など捨てます！」

宗道 「よう聞け、又四郎。お前の絵には運命を変える力が」

又四郎 「運命」

宗道 「お前は今、天からの大きな力に導かれておる」

又四郎 「（抱きつき）私は武家に生まれた武士にございます…」

宗道 「もちろんだとも。たとえどのような境遇に置かれても、

生涯、お前の体には武士の血が流れる」

奥村文次、登場。

長谷川道浄、後に続いてくる。

文次 「宗道様」

宗道 「おお、文次か」

道浄 「（お辞儀）長谷川道浄にございます。何やら急なお発ちだそうで」

宗道 「む。このまま陣へ出向くことに相成り。この地で引き渡す」

文次 「又四郎さん、どこへ」

又四郎 「（行こうとして）帰ります！私は合点が参りません」

宗道 「文次」

道浄 「もしや、まだお話しに」

宗道 「つい言いそびれてな」

文次 「(又四郎を捕まえ) 待たれよ、又四郎さん」
又四郎 「戻って私も出陣を。兄上達と一緒に」

宗道 「道浄殿、これにてお頼み申す」

道浄 「承知しました」

又四郎 「お待ちください、父上！」

宗道 「又四郎、くれぐれも達者で」

宗道、退場。

又四郎 「父上、父上！」

文次 「こらえなされ。武家であればご養子は致し方のないこと。

父上を恨んではなりませんぞ」

又四郎 「無礼な！誰が父を恨む。

私は歴とした畠山大殿の家臣、奥村家の一員じゃ」

逃れようとする又四郎。

道浄、軽く往なして捕える。

道浄 「又四郎殿、これも御仏のお導きと心得なされ。

それに何も、私は家業の染め物屋にしようというのでは」

文次 「存知ておろう、こちらのもう一つの家業。

能登でも指折りの絵描きということを。

しかも、扱うのは仏絵のみ」

道浄 「神仏を描くならば、武家の出には相応しい」

文次 「刀を絵筆に持ち替えて、精進する甲斐もある」

又四郎 「私は絵描きも商人も真っ平」

道浄 「聞きなさい。これまで菩提寺の本延寺で、いくつもそなたの絵を見た。

その色使い、筆さばき、いずれも稀なる才覚。

お約束致そう。私は必ずや、そなたを能登一の絵仏師にしてみせる」

又四郎 「そんな約束いるものか！私は武士だ、侍なんだ」

遠くで陣太鼓の音。

文次 「出立の合図が。間もなく人が寄せてくる」

道浄 「(強引に又四郎の手を引き) 参ろう」

又四郎 「私は行きとくない、離してくれ！父上！兄上エ！」

道浄、強引に又四郎を連れ、退場。

文次、後に続く。

波の音、消えていく。

暗転。

崩壊の音。

(狩野家屋敷)

あちこちから狩野派の弟子、登場。

「お成りイ、お成り」の声、聞こえてくる。
弟子達、声に続き場を盛り上げ、手際よく絵所の準備。
その後、道を開けて列を作る。

狩野元信、登場。

源四郎（幼少の永徳）を抱えている。

元信 「お成りイ、お成り。狩野源四郎様のお成りにござる（笑）」

弟子達、手をつけてお辞儀していく。

元信は誰にも孫を触らせはしない。

源四郎の手を取り絵筆の手ほどき。（白紙、墨なし）

元信 「そうら、ひと手、ふた手……。おお見事、見事。

次は松だぞ。筆はこのように……。下から上、そう力強く。

はたまた留めと払いはこう。ひと手、ふた手……」

狩野松栄、数人の弟子と共に登場。

松栄 「（手をつきお辞儀）父上。松栄、只今戻りました」

元信 「（顔を見ることなく）ひと手、ふた手」

松栄 「源四郎、よいなア。おじ様から直に絵を。

私の時はそのようなことはなかったぞ」

元信 「気が散る。修練の妨げ」

松栄 「（頭を下げ）お時間を割いて申し訳ありませんが、急ぎご相談。

つきましては、石山本願寺下絵についてのご指示を」

元信 「言われずとも承知。すでに大下絵は出来ておる故、今見せる」

松栄 「ご無礼を……。それでは奥にてお待ちしております」

松栄、弟子達と共に退場。

元信 「源四郎、絵についてはどの様な小さきことも、このじじがすべて教える。

他の者より手ほどきを受けること、一切、まかりならんぞ」

源四郎 「父上にも聞いてはいけないのですか」

元信 「あれに訊ねるなど以ての外。

意見でもしようものなら、そのまま打ち捨て聞き流せ。

ワシはな、この世で並というものが何より嫌い。

可もなく不可もなくなど、耳にするだけで寒気がする。

お前の父が正にそれじゃ」

源四郎 「父上が」

元信 「あれは、ワシが最も忙しい時代、焦って弟子共から手ほどきを受けた。

気がついた時はすでに遅し。並の手癖がついた後。

平々凡々、もはや先に望みはない。

この世にはな、ふた種類の人間しかおらん。

天分を授かる者、それに、授からぬ者。お前は前者、親父は後者よ。

天下の御用絵師と謳われたこの狩野家二代目棟梁元信が、

我が子を並みの絵師と揶揄され、はたまたそれを認めざるをえん屈辱、恥辱。

源四郎、お前にこの気持ち分かるか。え、お前にこの意味が」

源四郎 「父上には才がございません」

元信 「おお、そうじゃ、賢い子。お前は何でも呑み込みが早い。

よいか、心得ておけ。

この世に平等などというものは何も無い。

天は生まれながら人々に高低たかひくを作られるのだ。

稀なる才覚というものは、ごく限られた者だけに与えられる。

ワシはある日、それを自覚した。

今にお前もそれが分かる。

ワシには見えるのだ、高みに昇るお前の姿が。

よいな。お前は特別なのだ」

源四郎 「心得ました」

元信 「さあ、天分を授かったからには、精進は人の何十倍。

そら、今度は向こうでは屏風絵の手ほどきを。

ひと手、ふた手：ひと手、ふた手」

元信、源四郎を連れ、パネルの奥へ退場。

入れ違いに一人の男、現れる。

パネルの移動、二手に別れてに並ぶ。

照明、CHANGE。

その画面に光輝く屏風絵。

「洛中洛外図屏風（上杉本）」 浮かび上がる。

崩壊の音。

（洛中洛外図屏風）

絵を見つめる男。

狩野永徳。

弟子達が登場し、周囲に控える。

永徳 「無駄になった…。

これだけのものが全て無駄に…。

これ程まできらびやかな都の景色、描いて見せた者がどこにあったか。

お前達の目の前にしているこれこそが、

この世における最高の屏風絵というもの」

弟子達 「（頭を垂れる）…」

永徳 「將軍の失脚、武將の権力争い、それがどうした。

あの者達はいつまでも修羅を繰り返すだけ。

その責め苦を何故、我われの絵が負わねばならんのか。

ひき取り手のなくなったこの絵を、日の目も見ず、蔵の奥へとしまえというか」

弟子達 「(うつむいて) …」

永徳 「見よ、このきらめく都の御姿を。」

どの部分一つ切り取っても、克明に写し取った彩りの数々。

(絵を見ながら歩き回る)

上京隻には、上賀茂の社殿を控え、大徳寺、金閣寺。

嵯峨渡月橋を挟み、天龍寺から西芳寺。

下京隻には、帝の内裏を配し、永観堂、南禅寺。

中央は、祇園社の祭礼。

懸け物や細工まで丹念に調べ上げた山鉾の数々。

鴨川流れる東山には、清水寺、三十三間堂。

華やかな室町通りは、人の数さえ二千は越える。

その一人一人に異なる衣を着せ、

正月の祭事から、町衆の仕事ぶりまで隈なく再現してみせた。

これこそが都の花！

最も美しい時代、最も美しい姿。

それが、すべて…すべて無駄に」

小頭 「若」

弟子1 「お気持ちお察し致します、永徳様」

永徳 「何だと…。お前か。今、お前が言うたのか」

弟子1 「何か…私、お気に障るようなことを」

永徳 「お前らごとき並みの絵描きが、我の心の内を口にするなど。」

(扇で打ちつける) このたわけ。待て、逃げるか！」

弟子1 「申し訳…ございません」

永徳 「(つかまえて締め上げる) 我の指示なしでは何も描けぬ職人絵師ども！

お前等なんぞ能無しに、この気持ちの何が分かる、何が！」

弟子2 「お許しを。どうか、それ以上はもう」

弟子3 「永徳様」

小頭 「お手を！死んでしまいます」

弟子4 「永徳様、どうか、どうか」

永徳 「(つかんだ手を突き放す) ええい！平絵描きときたら」

弟子、激しく咳き込む。

松栄とその弟子、足早に登場。

松栄 「(大声) 永徳！」

永徳 「…」

松栄 「(弟子達に頭を下げ) この通りだ。」

おい、すぐに手当てをしてやれ」

弟子達、退場。

松栄 「永徳！足利義輝公ご逝去の知らせは聞いた。

洛中洛外図の預かり知らずは、真に気の毒。

それとて、この弟子達に何の咎がある。

永徳 「ましてや皆、お前より年上の者ばかりではないか」
「年。年齢がどうしたというんです。」

絵には何の関わりもないのです。
早うに生まれた分だけ絵の才に恵まれますか。
馬鹿々々しい。絵師に年など何の意味もない。
御覧なさい。荘厳なる天上世界からの眺めを。
これこそが言葉なき御魂の叫びです」

松栄

「恐ろしいことを。」

お前は我が父、元信の気質をそのまま受け継いでしもうた。
確かに父は並み外れた才覚に恵まれたが、
人を人とも思わぬ非情な振る舞いで生涯を終えた。

今のお前はその姿に生き写し」

永徳

「（高らかなる笑い）もし、己というものを知らずの振る舞いであるというなら、
それは驕りでございましょう。」

しかし、我やじじ様の場合はそれとは違う。

有体に申せば、これこそが我らの領域、

天より与えられた御力というもの。

我はそれを、今まで何度も感じて知っている」

「何という：お前の傲慢は年を負うごと酷くなる」

「その分、描く絵は美しさを増しております」

松栄

「永徳！」

永徳

「こればかりはいくら謙遜しても仕方がない。」

その道、極めたことのない者には決して分からぬ世界」

松栄

「人の心を軽んじる物言い、いつかその身に天罰の下る時が来るぞ」

永徳

「もし、天からの報いが下るといふなら、

その時は我が非を認め、野垂れ死んでもよございましょう。

しかしながら、万に一つもその恐れはない。

それが証拠に、我は幼き頃より誰よりも精進をし、

誰よりも厳しく修練に明け暮れた。

それが、じじ様と我のつくり上げた礎です。

この絵を御覧なさい。全てが何をも言わん」

松栄

「お前という奴は：そのようなことを無遠慮に口にして。

兎に角、身内の者には、常日頃からいたわりを忘れること相成らん。

それだけは決して。よいな」

永徳

「ご教訓、有難く受け賜ります。さても本日のご用向きは」

松栄

「大徳寺塔頭について」

永徳

「聚光院じゅこういん、もちろん伺っております」

松栄

「期日が迫り、往生しておる」

永徳 「よろしい、お手伝い致しますよう。

「さすれば、我に方丈をお任せ願いたい」

松栄 「方丈だと」

永徳 「前々よりよい絵柄が浮かんでおり」

松栄 「方丈といえは、その寺の長がたたずむ唯一の空間。棟梁の仕事ではないか」

永徳 「左様に堅くお考えあそばすな。

いくら我とて父上を差し置き、自分を御用の主格など。

松栄 「ここはあくまで、大事な絵を葬られた憐れな息子に華を持たせる親心と」

「仕様のない奴……。まあよい。

行き場を失った屏風絵ひとつでよくよするより、余程。

御用を司る絵師の家に生まれたからには、描く機会はいくらでもある。

むしろ、日々の注文に追われる暮らしの方がお前の為によいかも。

その細やか過ぎる心ではこの先、身が持たんからな」

松栄、退場。

見送る永徳、表情は冷たい。

永徳 「あの男は、何も分かかっておらん」

聞こえた周囲の者が凍りつく。

暗転。

崩壊の音。

(祝言)

提灯の明かり。

打掛姿の花嫁(浄)、登場。

文次が先導し義父母、親戚達が続く。

民謡(七尾まだら)の揃い声。

道浄とその妻、相が迎え入れる。

奥に長谷川家の番頭と手代1が並ぶ。

義父 「これにて万端整いましての送り届け。

何卒お引き立てのほど、お願い申し上げます」

道浄 「遠路はるばる」

相 「お寒かったですよう。さあさ、奥へ」

皆が座に就いていく。

婿の席のみが空いている。

文次 「どうです、能登広しといえど、これ程のご器量の嫁ごもおられますまい」

義父 「いや、めでたい。実にめでたい」

相 「子のない私共が嫡男を授かり、今度はこのような可愛い嫁を。

(お辞儀) 文次さん、この通りですよ」

文次 「いやあ、誰を持って行っても聞く耳をもたなかったご総領が、

ようやく嫁をとる気に。これで私も肩の荷が下りた」

道浄 「絵仏師として名を上げるまでは、家を継げんと申しまして」

相 「それはそれは頑なに」

義父 「それならもう安心。七尾で仏絵といえは長谷川の帯刀信春^{たてわき}。

そう言われるまでに」

道浄 「お蔭様で、私共もひと安心」

文次 「（涙ぐむ）あの小さかった又四郎さんが、いよいよ長谷川のご当主」

相 「本当、文次さんには色々お世話に」

義父 「それで、肝心の婿殿は」

道浄 「いや、それが…」

義母 「どうかなされましたか」

相 「実は、この四、五日帰って来ておらず」

義父 「何、五日も」

道浄 「出かけるといつも、何日も家を空けまして」

義母 「今日が婚礼の日と分かかっておられながら」

義父 「まさか、どこぞに決まったお方でも」

道浄 「いえいえ、そのご心配は」

義母 「しかし」

相 「行き先はいつも同じ。寺へ籠るのです」

義父 「寺」

道浄 「あちこちの仏像を前にして、そのお顔を拝みながら新しい絵を」

相 「描き出したらても動きません」

道浄 「お勤めも儘ならんと、寺からお小言がくるほどで」

相 「（浄に）よいですか。この家に嫁いだからには、まず始めに言うておきましょう。

お前の亭主は家業、染め物なれど、商人にあらず。

いずれは能登を代表する絵仏師と心得なさいませ」

義父 「ええ。それはよく伺っております」

道浄 「かの雪舟禅師はお亡くなりになるまでに、数名の直弟子をお取りになられた。

その中でも特に目をかけられたのが、等春和尚。

山水、花鳥もさることながら、仏絵においては品、格とも師の画風に生き写し。

京の誉れと謳われた」

相 「ある年、和尚は都を離れて能登を巡られ。

その折、大殿から御用絵師にと懇願を」

道浄 「我が父、法淳は、この機を逃すまいと、自らの絵を持参。

熱心に弟子入りを願って、直々に教えを乞うた。

それが長谷川家、代々に伝わる」

相 「そのため、あの子に等春様の一字を取って、信春と名を改めました」

道浄 「雪舟禅師、直系の五代目に当たります」

義父 「昨今、能登七尾の豊かさは京にも劣らず。

蒔絵、猿楽、茶の湯も盛ん。

特に絵にかけては目の肥えた者が多い。

その中で婿殿の絵は、いつも大層な評判」

「若い頃より何度も都へ行きを来させ、修行もさせた。

今の信春の腕前なら、どこの絵師にも劣るまい」

相 「どうぞ親ばかとお笑いだされ」

「いいえ、我が家でも婿殿が絵付けをされた着物は格別最良に。

ですが：娘の婚礼に姿も見せぬというのであっては」

「これこれ…」

文次 「いや、もう間もなく。今、呼びにやっとりますから…そうだろ」

手代2、登場。

手代2 「信春様がお戻りに」

文次 「やあ、ようやくか」

道浄 「早う、こちらへ」

信春、登場。

紙を持った手代3が続いている。

信春 「父上！母上！」

道浄 「信春」

義父 「おお、これは婿殿」

相 「今日の日を何と心得ます」

信春 「ご無礼仕りました。新しい絵の案が浮かび、どうしても」

相 「おのが婚礼ぞ。ちいとは落ち着きなされ」

信春 「それなればこそ、母上。この日に相応しい絵を。

おい、こっちへ並べてくれんか」

手代達、前に出て紙を拡げる。（白紙墨なし）

文次 「おおこれは」

道浄 「文殊、普賢の菩薩」

義母 「何とまあ」

義父 「見事、これは見事」

信春 「まだまだ。これを、対となるように」

信春、浄の両脇に紙を置かせる。

信春 「そら、中心に居まわすのは多宝如来。

分かるか、そなたはこの家の如来というわけだ」

「どうにも上手いこと仰る」

信春 「世辞ではないぞ。

我らは他の家とは違い、誰一人、血の繋がりが無い。

しかし、縁あって一つの家族、新たにそなたを迎え入れ、

これからも末永ごうに栄えて参りたい」

浄、顔を上げ。

浄 「何と美しい仏様…」
信春 「おお、初めてそなたの声を聞いた。名は」
文次 「名も知りませんか」
信春 「それどころではなかった」
浄 「浄にございます」
信春 「そなた、この絵が好きか」
相 「まあ、いきなりにそのような」
信春 「世辞はいらんぞ。思うがままに意見を」
浄 「あまりに心奪われ。もはや言葉が浮かびません。大切に心刻みます」
信春 「気に入った！父上、この嫁、生涯大事に致しますぞ」
義父 「めでたい、ホンにめでたい」
文次 「おー…冷や冷やした」
相 信春、勝手に杯を持ち、三々九度。
「これ、信春」
文次 「お見事、お見事」
道浄 「無理をするな。あれは酒が飲めん」
信春 「（杯を渡し、注ぎやる）さあ」
浄、三々九度。
文次 「おめでとうございます」
義母 「何と豪気な婿殿、実に頼もしい」
道浄 「そう仰って頂ければ」
義父 「めでたい、ホンにめでたい」
信春 「（立ち上がり絵に近づき）よいか、ここに落款というものがある」
道浄 「おいおい、信春」
文次 「もう酔うたか」
浄 「落款」
信春 「誰が描いてみせたかの署名だな。
ところが通常、仏絵にはそれがない、何故か」
文次 「何故です」
信春 「御仏に対する奉仕とされているからだ」
義父 「なるほど。それは真に尊いお志」
信春 「しかしな、ワシの考えはちいと違うぞ。
ワシは、たとえ仏絵だろうと描いた絵には堂々と名を記したい。
宮大工が梁のふちに道具や名を残すのと同じことじゃ（足元ふらつく）」
相 「信春」
信春 「絵仏師は都絵師に劣らず。
ワシは長谷川の家に入り、帯刀信春という立派な名を頂いた。
落款は、その名に恥じぬ大いなる証」
信春、民謡（七尾まだら）を一節、歌い出し、皆も加わる。
番頭 「あの負けん気の強さ。立派なもんだ」

手代1 「お武家の出の名残りか」

手代2 「都の絵師に余程、対抗心が」

手代3 「狩野派の若惣領の噂を耳にしてから、特にな」

番頭 「狩野派の若惣領」

手代1 「ほら。法眼、狩野元信の孫」

手代2 「永徳か」

手代3 「そう、狩野永徳。神童の誉れと大層な評判をとった」

手代1 「ついこの間も、見事な大屏風を描き上げたという話」

手代2 「若はそんな御用絵師に、向こうを張ろうと」

手代3 「口惜しいのだ。さほど年も変わらんしな」

番頭 「それにしてもだ。たいした豪儀よ」

信春、歌い終わる。

一同が歓声。

道浄 「この子は幼い頃より、誰にも負けじと修練に明け暮れた。

我らは絵の道を精進させることこそが務めと、一心に」

相 「私は違いますよ。長い間、神仏にお願いをして、何より我が子が欲しかった。

いつの日か願いが叶うと信じ、ようやく思いが。

これ程までに親思いの子を授かり、毎日が夢のように」

信春 「母上」

文次 「そうら、また泣いた」

相 「この子は家族のことになると弱い」

信春 「泣いてません。泣いとりませんで。

(盃を一気に飲み) さあ、もう一節いくか」

信春、倒れこむ。

浄 「お前様」

道浄 「あーあ、言わんこっちゃやない」

相 「誰か、床の用意を」

浄、介抱してやる。

手代達が手分けして動き出す。

信春 「(横になったまま合掌) 父上…兄上…」

相 「信春…」

道浄 「実は、今日は亡くなられた奥村家の父や兄の祥月命日でもある」

文次 「別れたあの日を最後に、皆、討ち死にをされた」

義父 「なるほど。今日この日に、この絵を亡き一族にも向けられたかったわけか」

相 「この子にとっては、これが皆と繋がるただ一つの手立て」

文次 「何ともまあ、寂しい因縁」

一同、信春を見つめる。

暗転。

崩壊の音。

(織田信長の軍勢)

能管の響き、I N。

一斉のリズムをとった足音、聞こえ出す。

槍(簡略の棒)を携えた陣笠姿の兵達、登場。

「永楽通宝紋」の幟旗を携えた旗大将の姿が見える。

一斉のリズムをとった動きで舞台上を進み行く。

能面の男(敦盛面)、登場。

通路(簡略の橋掛かり)を進み行く。

奥のパネルが開き、高座が見える。

敦盛面、高座に上がる。

兵達、進み行き、退場。

能管の響き、O U T。

兵達の足音が遠のいていく。

暗転。

崩壊の音。

(安土城御用)

遠くで鼓の音、聞こえる。

永徳、手つき、深々と頭を下げている。

安土普請奉行、登場。

奉行 「狩野家棟梁、永徳、面を上げよ」

永徳 「はは」

奉行 「祖父、元信は法眼の位。その跡取り、松栄の子に間違いあるまいか」

永徳 「はは。相違ございませぬ」

奉行 「なるほど。いかにも都人らしい佇まい。」

周知の通り、上様、この程、將軍足利義昭公をご追放あそばされ、

洛中の治安、一手に治めること相成った」

永徳 「織田信長公におかれましては、都での評判すこぶる高く、

お呼び頂きましたこと、この上なき誉に存じ上げます」

奉行 「都の民が我らにどのような噂をしておるか、それくらいは想像がつく。

叡山を討ち、堺を治め、遂にはこの上京一帯まで焼きつくせば、

冷酷非情な成り上がり者と、もっぱら好かぬのであるう」

永徳 「滅相もない。例え下賤の輩がどのように申そうとも、我ら狩野家は別。

代々、中枢のお方に仕えて参りました故、お人柄を見る目は確か。

上様におかれましては世に稀なる武将のご器量と存じ、

ご上京、謹んでお祝い申し上げます」

奉行 「御用絵師の棟梁までくると、世辞も手慣れて。まあよい、それだけ心遣い尽くせば結構。よいか、上様にあつてはくれぐれも謹んだ振る舞いを。さすれば直ちに首斬られることもあるまい」

永徳 「滅相もない。私、世辞だけは大の苦手。申し上げること、すべて真にございます。しかし、首…で、ございますか」

奉行 「言うておくが、これは戯言ではないぞ。本日は猿楽に興じておられるが、ひとたび機嫌を損なえばご様子は一変」

永徳 「はは。心得ましてございます…」

奉行 「御殿よりお達し申し伝える。」

かしこくも上様、大徳寺聚光院の襖絵に目をお留になられ、見事なりと、お褒めの言葉頂戴した。

これは真に稀有なこと故、誉と心得よ」

永徳 「有難き幸せ。子々孫々まで伝えます」

奉行 「十六面に禽鳥を描いたものであったな」

永徳 「四季花鳥図にございます」

奉行 「その後、住職より洛中洛外を描いた、花洛づくしの屏風があると聞き及ぶ」

永徳 「洛中洛外…。はい、いかにも」

奉行 「元々は、越後の上杉家に贈るため描かれたと聞かす」

永徳 「ご中心に謙信公を配してございます」

奉行 「上様、殊の外ご興味あそばされ、ご自身の目で確かめられるということ。気に入れば、そのままお引き受けになる。直ちに差し出せ」

永徳 「謹んで心得ましてございます」

奉行 「上様の目利きは、これまでのどのお方とも違う。良しとするものは、物や道具、茶器に及ばず。特に人の才は鋭くお見抜き」

永徳 「人の才にございますか」

奉行 「そこに身分もなければ、家柄もなし。これぞと思う者には惜しみなく力を注がれる。此度はそちにといいわけだが」

永徳 「お褒め賜り、天にも昇る気持ち」

鼓の音、終わる。

幾人かの拍手、聞こえる。

奉行 「よろしい、ついて参れ」

永徳 「は」

奉行 「真に噂通り、そつなく切れ者。これより謁見を許す」

永徳 「はは」

奉行 「上様より直々に申し伝えることあり。ただし、念を押して言うておくぞ、お近くを許されたからは、あらためて気を引き締めよ。」

永徳 「期待に応えられず、ご不興を招けば即座にこれ（首切る格好）」
「心得ましてございます」

奉行、退場。

お辞儀する永徳。

崩壊の音。

照明、CHANGE。

（本法寺門前）

夕暮れ時。

信春が激しく門を叩いている姿。

傍らに、浄が幼い久蔵を抱いて腰を下している。

等伯 「お頼み申す。誰か、誰か！」

門（パネル）を開け、小坊主、登場。

いぶかし気に様子を見やる。

小坊主 「何事か」

信春 「私、能登七尾の寺よりこちらへお尋ねした、長谷川信春と申す者。

故あつて都へ上つて参った。何卒、日堯^{にちぎょう}上人へお取次ぎを」

小坊主 「日堯様だと、藪から棒にそんな。」

ここ本法寺では、そのようなこと聞き及びませぬ。悪しからず」

信春 「お待ちください。すでに七尾のご住職より書状が届いておるはず。

今一度、お確かめを」

小坊主 「お上人は、ただ今ご病氣。誰にも会い申さん。

うちの単頭様よりきつく言い使っておるのだ。悪しからず」

信春 「（巻物を取り出し）どうかこれを。途中、野武士に追われ、

身ぐるみ剥がされながらも、これだけは肌身離さず」

小坊主 「こんな掛け軸を見せられてもなあ。

この寺は何処より規律に厳しい寺じゃ。悪しからず」

信春 「それならば、せめて敷地の内だけでも。ご覧の通り、子供が熱を」

小坊主 「何、病！尚更、中に入れることなど。悪しからず、悪しからず」

浄 「お待ちなさい。ついぞ甘いものを持ち合わせぬが、茶屋にてこの餅を。

今はこれしかないが、こちらで落ち着いた後にはたらふく…の」

小坊主 「これを、私に」

浄 「何とも可愛らしいお坊様じゃ」

小坊主 「（暫し考え）ちと待ちおれ」

小坊主、退場。

信春 「お前、なかなかやるな」

浄 「故郷を失い、帰る場所すらないのです。私とて必死」

信春 「それにしても、七尾の町があれほど荒れるとは。

我が領主の跡目争いに、上杉勢や一向衆まで入り乱れ。

家屋敷にお店の者達、何もかも失った」

浄 「あの戦火の中、皆が我らをかばい、襲いかかる兵から身を立てて（合掌）」

信春 「今でも、父、母の最期が目に浮かぶ。もう少し、ワシが何とか出来れば…」

浄 「何を仰います。お父上、お母上も、お前様を都へ出すことだけを望んだお最期」

信春 「しかし、ここへ来るまで、まさかこれ程ひどい目に」

浄 「今の世は乱れに乱れております」

信春 「あの峠越えで出くわした織田信長の軍勢、何と情け容赦ない」

浄 「延暦寺を焼き討ちされたのは本当だったのですね。あれでは気が荒いのも当然」

信春 「七尾を出る時持って出た、あれだけの金品もまるで」

浄 「それはもう仰いますな。親子三人、命があっただけでも」

信春 「しかし、このままでは」

久蔵 「ううん…」

浄 「久蔵、もうすぐですよ。辛抱なさい」

信春、門を叩く。

信春 「おおい、まだか。お頼み申す！お頼み申す！」

小坊主、すぐに姿を現す。

小坊主 「何事か」

信春 「何だ、まだそんな所にいたのか」

小坊主 「やはり、聞いてはおらんらしい。悪しからず」

信春 「口の周りがあんこだらけではないか。すぐ奥で餅を食うただけだな」

小坊主 「嘘じゃないよ、ホンとだよ。悪しからず」

信春 「何をこの悪しからず坊主。嘘をつくとためにならんぞ」

小坊主 「ホンとだよ。悪しからず。悪しからず」

信春 「ワシは元々武家の出じゃ。お前一人くらいひねりつぶすのは容易いぞ。

さあ、すぐに行って聞き直せ」

小坊主 「ひい！待ちおれ」

小坊主、慌てて退場。

浄 「お前様、落ち着いて」

信春 「すれた都人め」

浄 「どうしてそう、いつもこらえ性のない。

こういう時こそ辛抱、我慢にございます」

信春 「久蔵が熱にうなされ、落ち着いてなど。

やはり：こんな時に故郷を出たのは、ワシの考え違いか」

浄 「お前様という人は、家族のことになると人一倍心ほそくなる。

大事に思うて下さいますのは有り難いが、ここが大事。

（合掌）御仏もきつとお守りくださいます」

信春 「お前という女は、何とも肝の据わった。

む、確かにそうだな。ここまで来たら」

日通、登場。

托鉢帰りの様相。

日通 「もし。如何なされた」

信春 「旅の者ですが、子供が熱を」

日通 「（久蔵の傍へ）それはいかん」

信春 「あなた様は」

日通 「托鉢で帰りが遅れ、こんな時刻に」

浄 「それでは、こちらの」

日通 「日堯様のご容体が芳しくありません故、関連する寺から遣わされております」

信春 「私共は、能登七尾から参りました絵仏師」

日通 「そうすると、もしや長谷川様か」

信春 「お分かりで」

日通 「伺っております。日堯様より、お越しの折にはひと目お会いしたいと」

信春 「やはり、便りはこちらに」

浄 「お前様」

信春 「ようやく話の分かるご仁にお会いできた」

日通 「おおい、誰か手を」

小坊主、再び、すぐに姿を現す。

小坊主 「これは日通様。お呼びでございますか」

信春 「まだそんな近くに」

日通 「お客様だ。すぐに案内を」

小坊主 「しかし、単頭様に叱られます」

日通 「お師匠様からの仰せだ」

小坊主 「え！お上人の。それならそうと。

（慌てて巻物を出し）実はこちらを預かり」

信春 「やはり見せておらなんだ」

小坊主 「（舌を出して微笑み）悪しからず」

日通 「お子が熱を出されておる。すぐに奥で薬の用意を」

小坊主 「へーい」

信春 「現金な奴」

浄 「お前様」

日通 「今、この寺は日堯様のご意向で、法華衆のお集まりご勝手。

大勢の信者や僧が引つ切り無しに訪れる。

荒れた都で宿坊は少なく、本堂も常に一杯、

法堂から鐘つき台、中には軒下へ居つく者さえ。

元よりおる者達は、食事の世話や金の工面で皆、疲弊しておる。

面倒がられたのだろう」

浄 「そのようなご事情ですと、これから私共は」

日通 「ご心配なく。この寺に教行院という塔頭がある。

皆さん、そちらへ。

何、遠慮は無用、私も堺から訪れて以来、そこに寝泊まりを。
暫く骨を休められよ」

信春 「日通殿と申されましたな。ホンに何から何まで」

日通 「手紙のご様子では、都へ移られるとのこと。」

それならば、これから長くのお付き合いとなりましょう」

浄 「お前様、これどうやく」

信春 「む、いよいよ都に」

一同、門を入り行く。

暗転。

崩壊の音。

(狩野家屋敷)

松栄、弟子達と登場。

松栄 「永徳、永徳はどこに」

永徳、登場。

永徳 「父上。お目覚めにございまするか」

松栄 「真か！弟子達の話は」

永徳 「昨日は大層遅い帰りとなりました故、お起こしするのをためらい。
万事は伴の者が先にお伝えした通り」

松栄 「狩野家全体に関わる大事を、お前一人で決めてきたのか」

永徳 「これでも熟考の末にございます」

松栄 「その場で答えて何が熟考か」

永徳 「何しろお相手は神をも恐れぬ御仁」

松栄 「あの信長という男。こともあろうに御用を司る絵師の嫡男を都から連れ出し、
安土などという聞いたこともない田舎町へ移り住めと！」

永徳 「評判通り、前例のないことをおやりになる」

松栄 「だから、お呼びだては病を偽り先延ばしにせいと。」

永徳 「今からでも遅うはない、公家の方々にお伺いをたて」

松栄 「お止めください。上様は、すでに手筈を」

松栄 「馬鹿を言え。決めたその日に動き出す者がどこに」

永徳 「それが。あの方は、今までの武将とはまるで違う。」

何よりも時をお詰めになることを第一と考え、お決めあそばす事はすべて実行。
出来ぬとあらば無能とみなし、これまでの地位など迷わずお取り上げに」

松栄 「情けを知らぬ魔人とはそういうことか…」

永徳 「しかしながら父上、我は大いにあの男に惹かれました」

松栄 「何」

永徳 「僅かな間にも覗かせる、繊細な気質とあの大胆さ。」

松栄 「そして、何よりも我を惹きつけるのは真を見抜く審美眼」

松栄 「審美眼」

永徳 「あの方は、洛中洛外図をお見初めに。

上杉家へご贈答の品とされるものが決まりました」

松栄 「洛中洛外……。ああ、あの屏風か」

永徳 「あの方は、あの絵の格をひと目でお見抜き」

「自分の絵を褒められて、我を忘れたか」

永徳 「ものを見定めるといふ力は、万事先見の明に通じます。

有体に申せばあの方、我と同じ匂いのする」

松栄 「お前と似ているだと」

「父上、我はもう決めました」

松栄 「永徳」

永徳 「狩野家は今、我が棟梁」

松栄 「お前一人の考えで決められる問題か。

その背中には一族、門下、すべての行く末がかかって」

永徳 「だからこそ、我は決心を。」

「昨今、朝廷、公家達がこれ程までに落ちぶれ、

この先、一門の将来を預けられましようや」

松栄 「しかし、武家はどう足掻いても朝廷の上には立てんのだぞ」

永徳 「いいえ。これからは武将が頂きの時代。

位の上下は変えられずとも、政を治め、人を握り、金を握り。

今、この時に身を寄せねば、狩野の家に明日はない」

松栄 「そんな、お前のにわかな見立てなど」

永徳 「父上、我は胸躍らせているのです。

安土の城は前代未聞の大きさと聞く。

山の頂きに石垣を築き、琵琶湖を眼下に見渡して、

我が絵の数々が頂点に立ち、国中を見通すのです。

もはやそれは、我が城下と同じではありませんか。

信長が人物か人物でないか、問題はそこにございませぬ。

大事なのは、私の絵を持つに相応しいか否か、その一点」

「お前という奴は。結局、自分の絵のことしか頭にない」

永徳 「目を閉じて、よくご想像なさい。

我が絵が雲の上に立つ姿を。

見えます、見えます。

この世に生まれる庄倒的に美しい絵が、私の目にはもう」

松栄 「馬鹿馬鹿しい。また、お前の夢物語か」

永徳 「いいえ、本気です。

我は御年三十。いささか早うございしますが、これを機に家督を譲ります。

京狩野家棟梁は弟、宗秀そうしゅう ということに」

松栄 「永徳、お前」

永徳 「行くからには、身命かけて参ります」

松栄 「子供達はとうする」

永徳 「嫡男の右京だけ共に連れて」

松栄 「あの子はまだ十になつたばかり」

永徳 「我がその年には、花鳥、遊樂、漢画、道釈、一通り自在に描けた。我が子であれば将来のため、あらゆる技法の習得を」

松栄 「しかし」

永徳 「その代り、次男以下はこのまま京へ残します。

それならば、父上のご心配の種も減るはず。

何、私に限ってへまはしません。

見事、御用を勤め上げ、

そう遠くないうちに、皆を呼び寄せてご覧に入れましょう。

狩野家始祖より脈々と続く御用のお勤めを、我が大きく広げてみせるのです」

松栄 「お前がそこまで言い出すとは…。

仕方ない、行くなら行くで手筈を整えよう。

ただし、何があつても無理をするなよ。

一族の棟梁をみすみす不用意に送り出せるものか」

永徳 「有難き幸せ。さすれば、蔵の絵道具一切をお譲り下さいませ。

あるだけの荷車をかき集め、早速、宿替えの用意を」

「それくらいこのと。後からでもどっさり送ってやる」

「出立は急を要します。代替わりのお披露目は略式にて。

父上、すぐさま、ご準備を」

小頭が入り来る。

小頭 「若様、荷台の用意が整いました」

永徳 「蔵に集めて積み込みを。父上、鍵をお貸しく下さいませ」

松栄 「ワシの返事する前にすっかり手筈を。戯けが。ついて参れ」

永徳 「承知致しました。

(行こうとするが止まり) おや、空耳か。いや、我には確かに聞こえる、

安土の城に上がる感嘆の音が」

永徳、高らかに笑い、退場。

一同、それに続く。

暗転。

崩壊の音。

(堺 油屋の一室)

多くのパネルが下がる。

絵所、写しの作業場。

日通、信春の言葉を書き留めている。

信春

「牧谿は宋の中にあつて幻想の情景を描く名人。筆づかいは実に多彩で自由自在、手の平で玉を転がすがごとく。淡く柔らかな光、目に見えぬ気までを絵にしてみせる。静かなる絵というのは正にこのこと。」

同時代の夏珪かけいや馬遠ばえん、玉潤ぎよくん、いずれとも異なる。

日通

先の時代に一度は廃れたというが、まさに今、見直す時が来ておるといえる」
「なるほど。あなたにはいつも教えられることばかりだが、絵の目利きや知識においては特に長けておられる。今後はこうして漏らさずに書き留めておきたい」

信春

「(硯を取出し、墨をすり出す) ワシの話など残して何が面白い」
「寺を訪れる若い絵描きのよい指針となる。」

日通

それに、私が言うのも何だが、あなたは人として面白い。日々起こるつれづれも残して、いずれまとめてみせよう」

信春

「もの好きな男よ。ワシには日通殿の方がよほど物知りで面白いが」

日通

「こちらに通うようになってそろそろ五年か。」

信春

商いが忙しくなっても、暇を見つけてはこうして絵の写しに」

信春

「都より川を下ればこの堺という所、まるで異国の景色。」

日通

新しい世界を間近で知り、この目に残したい絵も山ほど。」

日通

注文の品を月ごと届けに通うなら、その機会を無駄にしとうはない」

日通

「絵屋という仕事はどういうものか、初めは分からなんだが、

信春

兎に角、繁盛しきりで何より」

信春

「親子三人、食うや食わずで都へ落ち着いてから、

日通

どうにか本法寺の厄介で路頭に迷わずすんだが、いつまでもそれでは。

信春

しかし、都には面白い商いがあるものよ。」

日通

色紙や扇、襖に短冊、頼まれたらどんなものにも描いてみせる。これほどワシにびったりな仕事もありやせん」

日通

「来られて早々、日堯上人の姿画を描かれたのがよかった。

信春

あれがえらく評判」

信春

「それも、日通殿があちこち声を掛けてくれたおかげ」

日通

「久蔵さんの下にもお子が増えましたからな。」

信春

何より、奥方の内助にはいつも胸を打たれる。」

日通

及ばずながらご家族に報いたい」

信春

「家族が増えるのはワシにとって何より。」

日通

「家族が増えるのはワシにとって何より。」

信春

「まあまあ、そう性急に息せき切らず」

日通

「安土では、狩野永徳がまた大仕事をしたと聞く。」

信春

同じ絵師ならああいう所で。その為にワシは都へ出たのだから」

日通

「私の実家は商いで安土にも出入りをするが、それは立派な城らしい。」

信春

しかし、絵に関していうなら兄はあなたに感心しきりですぞ。」

奥の寄り合いが終わったら、今夜もひとつご談義をと」

信春 「宴か。ここへ来るのはそれも楽しみ、すっかり酒の味も憶えてしまった」
日通 「それもまた、よいではありませんか」

二人、笑い合う。

丁稚、登場。

丁稚 「あの、旦那様のお客人でお会いになりたいという方が」

日通 「兄上のお客、はて。(立ち上がり) おそらく檀家の筋だろう。

たまに実家に戻ってもゆつくりさせてもらえん、もらえんと」

日通、丁稚と共に退場。

信春、パネルに向かい写しを始める。

静かに入り来る男、千宗易(利休)。

宗易 「お一人か」

信春 「家の者ならこの奥に。お迷いかな、初めて見る顔だが」

宗易 「いや、こちらに堺まで足しげく通い、あちこちで写しをする京の絵描きがおると、

そんな噂を耳にして(白地のパネルを見て回る)」

信春 「町衆のお方なら、こちらの油屋、それとも天王寺屋のご関係か」

宗易 「お二方とは懇意に違いないが、当たらずといえども遠からず。

なるほど、これは牧谿か」

信春 「(再び絵を描きだし) 絵をご所望かな。それとも、お宅にもいくらか絵が。

名のある物なら一度、写しに参りたい」

宗易 「絵なら多少の収集も。必要とあらば、是非。他についてもあるしな」

信春 「お宅もご商売は廻船か」

宗易 「実家は魚の卸し」

信春 「ほう、とと屋か」

宗易 「今は手広くやっとなるがな」

信春 「それで、どこへ行けば」

宗易 「そうさな：アテの所へ来られるのもよいが、

京に出入りする塔頭がある。そちらの寺でも」

信春 「ほう、寺はどちらの」

宗易 「お前様のお店のそば」

信春 「ワシの絵屋を知ってか」

宗易 「宗園和尚はご存知か」

信春 「大徳寺の春屋宗園しゅんおくそうえん：もちろん名だけは。あの方とご懇意に」

宗易 「牧谿ならあの寺に幾枚もあつたはず。頼めばいつでも写せよう。

来れば茶でも進ぜる」

信春 「茶か。茶はダメだ。あれは大の苦手」

宗易 「嫌いか」

信春 「ワシは堅苦しいのがすかん」

宗易 「(笑) 何、アテの茶は、客人の作法にゆるい。まあ、一度来られい」

信春 「大徳寺の絵を写せるならいつでも行くが。旦那のお名は」
宗易 「名か、堺のとと屋で通じよう（笑）」

丁稚と日通、戻ってくる。

丁稚 「おや、ここです。こちらにおられた」

日通 「（驚いて）これは」

宗易 「なかなか面白い男」

日通 「こちらをご覧ください」

宗易 「本うたのじよう手がおると聞いて。

逸品なら、自分の目で確かめてみようと思うてな。

行儀は悪いが、筆だけは感心しきり（笑）」

日通 「いやはや、そのようなお言葉」

宗易 「兄上にはよしなに。

（信春に）の、いつでも来られい」

利休、丁稚、退場。

信春 「はて、今のお方」

日通 「知らずに話しておられたのか。

信春 「うむ…いや、まあ」

日通 「千宗易。今や信長様より大変なご信頼をもたれた堺の商人。

特に茶の湯は、これからあの方が天下」

信春 「千宗易…あれが」

日通 「えらい大物が現れた」

信春 「思いもかけず部屋を間違われたのも幸い」

日通 「何をそんな。ここへは何度も訪れ、迷うはずも。

あなたを見に来られたのですよ」

信春 「ワシを」

日通 「（喜び）お目にかないましたぞ。さてどうする」

信春 「どうすると言われても、ワシは…どうする」

日通 「あの方のお声があれば、今まで出入りのなかったお武家や寺院からの依頼も。

注文筋が一変しますぞ」

信春 「まさか、そんな…」

日通 「だから言ったでしょう、精進は無駄にならんと。

どうしたんです、そんな狐につままれたような顔」

信春 「あ、いや…」

日通 「お、こうしてはおられん。急いでお見送りを。ほうら、立った立った」

日通と信春、退場。

暗転。

少年の聖歌合唱（グレゴリオ聖歌 ラテン語）、聞こえる。
安土普請奉行を先頭に家臣達、登場。

その後を宣教師ヴァリニャーノ、通詞役ルイス・フロイス。

少年使節団、合唱をしながら登場。

皆、ひだ付き襟（ラフ）をつけている。

永徳、それに続く。

少年達の聖歌が終わる。

奉行 「ヴァリニャーノ殿、フロイス殿、これへ」

ヴァリニャーノとフロイス 「は」

奉行 「この季節に長崎を発てば、

シナを経て天竺ゴアにたどり着くのは風を待つて半年。

そこからポルトガル、イスパニアを渡り、

ローマ教皇グレゴリウスに謁見するまでには、

ヴァリニャーノ殿、およそ二年はかかるうな」

フロイス 「（ヴァリニャーノと話し通訳）確かに大きな航海となりますが、

それらをお許しになられた上様の寛大なるお心。

ご支援を賜り、お礼の言葉もございません」

奉行 「我が国王、織田信長公は、そなたらキリシタン宣教師と会われたことで、

この国で誰よりも先に、新しい世を理解された。

海の向こうに広がる大きな世界を」

フロイス 「上様よりご依頼を受け、天正少年使節として、

島原のセミナリオから早速、この四人を。

ローマ教皇にお目通りを致し、上様のお考えの数々、お伝え致しとう存じます」

奉行 「こうして送り出すのも、やがてはそなたの国と手を結び、

共に繁栄を築こうというお考え。

上様は、この国でまだ誰も考えつかない壮大な計画をもっておられる。

どうじゃ、船荷はもとよりこの国ならではの貴重な土産の数々。

どれも最高の品を揃えた」

パネルに明かりが入る。（白地、墨なし）

フロイス 「有難き幸せ。この国の工芸、装飾はまさに芸術。

中でも安土の城を描いたこの屏風絵は圧巻にございます」

奉行 「永徳、近う」

永徳 「は」

奉行 「ここに控える狩野永徳が、城内の絵一切を取り仕切り、

その後、上様直々にご依頼頂いたのがこの屏風」

フロイス 「この城こそ、まさに上様、最高のお力の証」

奉行 「ヴァリニャーノ殿が初めて上様に謁見を許された時、

このような荘厳な城は見たことがないと、一際、驚いておったな。

上様はよくご記憶になられて、此度、その絵をお譲りに」

フロイス 「そのような貴重な品を我々へ」

奉行 「この国がいかに優れた天下人の住まうところであるか、ひと目で知れよう。

永徳、よくぞここまで描いた」

永徳 「本来、このような場でございますれば、謙遜申し上げることが必定と存じますが、此度ばかりはお許しくださいませ。

安土城の御用におきましては、ひいきなしに見ても別格の出来栄え」

フロイス 「あれは、我が国の画家達にも肩を並べる美しさ」

永徳 「安土山にそびえ立つこの城は、

正に神の域までお達しあそばされた上様の御姿そのもの。

それに見合う絵をと、こちらも命がけに。

見まごうばかりの景色の上に五層七階の楼閣、

そこへ我が絵がずらりと並ぶ。

地下から上がれば、花鳥、賢人、龍虎、鳳凰。

朱塗りの八角堂に釈迦の図を描けば、

最上階の天守は黄金に敷き詰められ、聖人、天子の数々、

その他、飛龍、鯢、天人に至るまで、

何一つ見劣るものはなく、今生、最高のものに仕上げました」

奉行 「(笑) もうよい。此奴、上様をだしにして自分の絵を褒めちぎるとは」

永徳 「いえいえ、私はただ、この上様の御城を讃えて」

奉行 「分かった、分かった。その方らもしかと聞いたな。

くれぐれもこの絵、大事にグレゴリオ殿の元へ」

永徳 「確かに承りました」

奉行 「お前たちが帰る頃には、上様念願の天下布武を行い、

世の中はがらりと変わっていることだろう」

少年使節団1 「♪沢山の素晴らしいものを見聞きして参ります」

少年使節団2 「♪必ずや皆様のお役に立つことを夢見て」

少年使節団3, 4 「(合唱) ♪行つてまいりませーす」

奉行 「よう言うた。楽しみにして帰ってくるがいい」

奉行を先頭に一同、退場。

グレゴリオ聖歌、IN。

永徳、満足げに天上を見つめた後、退場。

ゆっくりと暗転。

一斉なるリズムを取った足音、聞こえ出す。

怒号、聞こえる。

(本能寺の変)

狩野派の弟子達が慌てて登場。
小頭が指示を出している姿。

永徳、登場。

小頭 「若」

永徳 「あの声は」

小頭 「今、町まで見にやっております」

永徳 「戦か…！」

小頭 「人の行き来が多すぎて、全くもって何が起きているのか」

永徳 「上様は今、京へお上りのはず」

弟子の一人が駆け込んでくる。

弟子1 「小頭！」

小頭 「どうだった」

弟子1 「お気を確かに！明智光秀、謀反。都にて信長公が討たれました」

永徳 「何！上様が」

小頭 「誠か」

弟子1 「間違いありません。狙われたのは本能寺です！」

一同、退場。

照明、CHANGE。

グレゴリオ聖歌、VOLUME UP。

槍（簡略の棒）を携えた陣笠姿の兵達、登場。

「桔梗紋」の幟旗を携えた旗大将の姿が見える。

一斉のリズムを取った動きで舞台上を進み行く。

やがて、奥に並んだパネルを取り囲む。

主君らしき男、軍配を挙げる。

兵達、怒号を上げて、再びリズムを取った足音、動き、始める。

パネルが開く。

能管、鼓の響き、IN。

幸若舞「敦盛」、聞こえてくる。

高座に能面の男、舞う姿が見える。

照明、CHANGE。

舞台前面に、永徳と弟子達。

永徳 「我は城へ上る」

小頭 「若」

永徳 「絵所から荷を積み込め」

弟子1 「荷を。無理です」

弟子2 「運ぶ手立てがございません」

永徳 「あそこには出来上がった絵が山ほどある。

それに、二度と手に入れることの出来ん絵の具や道具も」

弟子1 「瀬田の唐橋はすでに落ち、琵琶湖を渡れません」

東海道、中山道とも兵達で入り乱れておるでしょう」

弟子2 「逃げ惑う人々で、船など見つかるはずも」

永徳 「我の絵を残せるなら、命など惜しゅうない」

小頭 「お待ちください」

弟子1 「ご棟梁にもしもの事があつたら」

弟子2 「お家の方々に顔向け出来ません」

永徳 「屏風一隻、襖一枚でもいい！何としても持ち出せ」

小頭 「お願いです、どうかお諦めを！」

兵達の怒号。

弟子3 「おお！火がついた」

弟子4 「安土の城が」

弟子2 「もうお終いだ」

小頭 「若、これ以上は」

永徳 「城が…私の絵が！」

小頭 「今いる者達、すべて集める。安土を出るぞ」

弟子3 4 「(周囲を駆け出す)分かりました！」

弟子1 「しかし、どうやって」

弟子2 「琵琶湖の畔は、野武士がうろつき、とても通れるものではない」

小頭 「一旦、歩いて北上する。平地を抜けて長浜に向かえば、対岸の船もあるやも」

弟子1 「それで駄目なら若狭まで出て街道を南下しよう、助かる見込みはまだある」

弟子2 「京へさえ入れば、あとはどうにでもなるしな」

小頭 「それにはここを一刻も早く離れることだ」

弟子1 「承知」

弟子2 「ご棟梁、参りましょう」

永徳 「燃えていく…私の絵が！」

小頭 「今はお逃げを。ここは危のうございます」

永徳 「私の絵が…」

小頭 「若」

永徳 「燃えていく…燃えていく」

グレゴリオ聖歌、圧倒的に盛り上がる。

パネルが閉じられていく。

能面の男、姿が見えなくなる。

兵達の足音、高まる。

暗転。

崩壊の音。

同時にすべての音、STOP。

パネルに「唐獅子図」、浮かび上がる。

(聚楽第)

久蔵が「唐獅子図」を見ている。

松栄、登場。

松栄 「この絵ひとつで、大名一国の、和睦の儀式に取り交わされるらしい」

久蔵 「（気がついてお辞儀）…」

松栄 「大坂の城で壁一面にあったものを、屏風に直してここへ運ばせたのだ」

久蔵 「何という威風堂々とした」

松栄 「大坂の城が出来たばかりで、今度は京に新たなこの城。

将来、帝をお迎えするため、その名も聚楽第じゅらくていと決まった」

久蔵 「聚楽第」

松栄 「主は、朝廷より豊臣の姓を頂いて、

関白殿下、豊臣秀吉と改められた。

何とも、わずか五年でこの世の中の変わり様」

久蔵 「随分とお詳しいのですね」

松栄 「それよりこの絵を、どう感じるかな」

久蔵 「何やら恐ろしい執念のようなものを」

松栄 「お若いのによく見抜かれる。

実際、安土の城が焼け、一夜ですべての絵を失うてしもうた。

あれの落胆は相当なもの。

これは、その後の渾身の作であるからな」

久蔵 「あれ…とは、ご身内ですか」

松栄 「そなたは、狩野の者ではないな」

久蔵 「長谷川久蔵と申します。父がこちらでお手伝いを。

本日はこちらへ道具を届けるよう言いっかり。

普段は洛中にて絵屋の仕事を」

松栄 「絵屋か。近頃は、そなたらの絵も生き生きとして見える。

御用絵の窮屈さとは違い、かつ達に描かれてな」

小頭、登場。

小頭 「御大、こちらでしたか」

久蔵 「御大…」

小頭 「永徳様が大坂よりお着きで」

久蔵 「（すぐさま手をつけてお辞儀）狩野松栄様で。これは真に失礼を」

松栄 「此度、応援の絵師の一人、長谷川殿のご息だ」

小頭 「何、長谷川。では信春殿の…！」

久蔵 「久蔵にございます」

松栄 「どうした」

小頭 「それが…今、その長谷川殿と永徳様が」

久蔵 「え、父が」

松栄 「また揉めごとか」

小頭 「ここは御大に執り成していただけないかと」

松栄 「すぐ行く。ワシはそのために来ているようなものだ」

一同、退場。

「唐獅子図」が消え、パネルがばらける。

パネルの奥から、永徳と弟子達、登場。
信春、後を追って登場。

一つのパネルが中央に。(白地、墨なし)

信春 「ご棟梁。それは理不尽なことを仰る。

不足があれば、描き直します、訳をお聞かせ願おう」

永徳 「繰り返させるな。沙汰は一度で聞き入れてもらいたい」

信春 「(中央のパネルを指し)我が受け持ちには、この山水の他に、岩と波の図が」

永徳 「構想が変わった。山水を仕上げたなら帰ってよし」

信春 「しかし」

永徳 「おい、給金は初めの約束通りにしてやれ」

弟子1 「かしこまりました」

信春 「そのようなことを言っているのでは」

永徳 「それ以上言うと、我もただではおかんぞ」

松栄と小頭、その後ろに久蔵、登場。

松栄 「永徳、何事か」

久蔵 「父上」

信春 「冗談じゃない。それなら、こっちで願い下げだ」

弟子1 「その方、無礼ではないか」

信春 「どちらが無礼か。

関白殿下が京に入る初めての城、都中の絵師で力を尽くせと頼まれて来たのだ。他にも多くの門外絵師がいる中で、何故、ワシだけが途中で終いにされるか。納得がいかん」

松栄 「まあ、長谷川殿。お腹立ちもおありだろうが、ここは一先ず」

信春 「しかし、昨日まではこのまま進めるよう小頭にも言われておった。

それが、ご棟梁がいらした途端、このような」

永徳 「それならば言おう」

松栄 「永徳」

信春 「結構。お聞かせ願おう」

永徳 「そなたの絵はちと柔らかかみが過ぎる。

光の差し込む表の側に、人物の描写も手薄。

橋と道の傾斜も甘ければ、庵の置き位置、三遠、六法もいささか不明確」

信春 「三遠ですと。高、平、深のどれが」

永徳 「どれもすべて。そのために粉本を手渡し、見本として絵も置いてある」

信春 「何を仰る。粉本通りでは、まるで情緒というものが」

「絵に関わることは一切、狩野の家が決める。請負いならば従っておればよい」

信春 「それならば沢山。そこまで言われて黙っておられるか。久蔵、帰るぞ」

久蔵 「父上」

信春 「(松栄に)ご縁がなかったものと。ご免」

信春、退場。

久蔵、皆に一礼の後、後を追う。

永徳 「抱える絵師が増えると、ああいう輩が出てきて困る。

（小頭に）門外の請負いは、これから注意せい」

松栄 「お前は、近頃、頑なが過ぎるように見えるが。

疲れて顔色もひどい。少し休め」

永徳 「これだけの御用の数となりますと、そういうわけにも」

「あの絵のどこが気に食わん」

永徳 「そう、他の絵とそぐいませんな」

松栄 「ふむ」

永徳 「ひとつ城での御用というものは、調和こそが何よりも肝要。

大広間から庭木に至るまで、あらゆることへ気を配り、

ひとつつ世界に表さなければ」

松栄 「あの絵はそれらから、浮くと」

永徳 「狩野の一門を色付けするのは棟梁である我の才覚。

ひとつつ妥協を許せば、が城は崩れ、取り返しをつかないことに」

松栄 「それはもちろん。ワシにも分かっておる」

永徳 「本音を言えば、この手ですべてを描きたい。

ひとつの絵でとやかく言うとか言わぬとか、そういう次元の話では」

永徳、退場。

弟子達、それに続く。

松栄、再び振り返り、信春のパネルを見やる。

暗転。

崩壊の音。

（大徳寺 三玄院）

のどかな野鳥のさえずり聞こえる。

パネル、唐紙の襖に見立てた桐の文様。

利休と信春が向き合う。

利休 「松本…三日月、松島、それに珠光じゅこうの小茄子こなすび。

蓮実はすみの香合かうあわせに、珠徳しゅとくの茶杓ちやしやく …。

かつてこの目を喜ばせた茶碗や道具は、本能寺で信長公と共に消えた。
人も物も、一期一会。

乱世を生き抜くことの難しさよ。

茶の湯は戦へ出向く者を送るために盛んになったともいえる。

茶の道にはそういう姿一面が」

信春 「なるほど。ワシは、とんと茶に疎いが、宗易様」

利休 「今は、利休」

信春 「そうでした…つい。」

利休様、お志は、絵を描くそれと相通じますな。

双方、人の心を和らぐあらいごと」

「能登では絵仏師をしておったな。」

武家の生き死にとは尚更、縁が深い」

「元々は武士の家に生まれてございますからな。」

縁あってもらわれた家が仏絵を専門に描いておりました」

利休 「雪舟の弟子に当たるといふのは」

信春 「真にございます。直弟子の等春禅師より祖父が手ほどきを。

家は代々その直系」

利休 「堺で初めて会ってからも随分になるな。」

この大徳寺での写しも熱心に通うと聞く」

信春 「口うるさい宗園和尚が何かと親身に」

利休 「アテはこの寺に縁が深い。」

宗^{そうぎん}新 禅師を師と仰ぎ、元は堺の寺で禅の修行をしたが、

京へ上がるようになってからも様々にお力添えを。

宗園和尚ともその頃からの仲」

信春 「なるほど、その頃からの古だぬきか」

利休 「今や太閤殿下の聚楽第に屋敷を構え、

先ごろ、北野天神での大茶会^{だいさのえ}も満足に終わった。

それもこれも、これまでこの寺の引き立てがあつたればこそ…そこで。

此度、ご恩に報いるため、三門へ楼上をご寄進致す」

信春 「あの三門を二階建てに」

利休 「それに際し、探しておる。そこに相応しい絵を描く者を」

信春 「（驚いて顔を上げる）…」

利休 「お前に任せようと思う」

信春 「ワシが…大徳寺の三門を」

利休 「不足か」

信春 「滅相もない。あまりに思いもかけぬこと」

利休 「三門は空、無相、無作の三解脱の門を表す。

楼上は極楽の姿を映した浄土の化身。

釈迦如来を中央にして、脇侍、十六羅漢をご安置。

その天井には龍を。

お前の好きに描いてよろしい」

信春 「天井画の龍を」

利休 「柱絵は何とする」

信春 「楼上ならば…阿吽の仁王と極楽を舞う天人天女を」

利休 「流石は絵仏師、その道に長ける。」

信春 「任せよう。条件はいずれも狩野派と異なるものを」
「は」

利休 「聚楽第の手伝いをしたな」

信春 「ひと間だけです」

利休 「それを見た」

信春 「はい」

利休 「ひと際違う絵の風情、心に留まった。ただただ、唸るばかり」

信春 「利休様」

利休 「アテに任せればよろしい。

世の中へ出してやる」

信春 「（手をつきお辞儀）何と言葉にしてよいやら」

利休 「まずは名を売れ」

信春 「名：ですか」

利休 「人は名を知り、初めて目を惹く。

もちろん、それに相応しい腕がなければ、束の間の夢と終わるが、

お前は十分、鍛錬を積んだ」

信春 「（お辞儀）…」

利休 「これまでよう辛抱したな」

信春 「しかし：名を知られるなど、そう簡単には」

「ここにある襖を。桐の文様は太閤殿下のご寄進の証」

信春 「初めてこの唐紙を見た時、あまりの美しさに描きたい絵の姿がすぐに浮かんで。

宗園和尚へ熱心に頼みましたが、けんもほろろに。

全く相手などしてもらえず」

利休 「だから、その浮かんだ絵をここに描いて見せよと言うておる」

信春 「ええっ…」

利休 「今、宗園和尚は、遠出の旅にて留守中」

信春 「しかし、それは」

利休 「心配するな。すでに許しは取ってある。

ただし、あくまでも住職は承知せず。

お前が勝手に描いたことに」

信春 「私が、勝手に」

利休 「あまりの唐紙の美しさに止めるのも聞かず、

留守に上がりこんで絵を描いた。そういう手はずに」

信春 「そういう手はず：いや、しかし」

利休 「たちまち都中に評判がたち、人々が見に訪れよう。

名はすぐに広まる」

信春 「大胆ですな。それは広まるかもしれませんが。

万が一：太閤様のお耳にでも入ったら」

利休 「殿下には頃合いを見てお話しを。

描いた絵をアテが褒めれば、殿下も咎めはせんだろう」

信春 「そんなに上手くいきますか」

利休 「それは、お前の覚悟次第」

信春 「覚悟」

利休 「俗世の段を大きく駆け上がるには、一か八かの覚悟の時がある。

一世一代とはそういうことではないか」

信春 「左様でございますな…覚悟を決めましょう」

利休 「噂が世に出まわる頃には三門の絵も仕上がり、

一層、注目は集まる。それから先は、さらに精進。

そう遠くない日に、御用の仕事も入ろう。

今度は棟梁としての御用がな」

信春 「何故…ワシみたいな者にそのような」

利休 「そうさな、本うたのじよう手よ」

信春 「本うたのじよう手」

利休 「本物、ということ。」

堺で初めてお前の絵を見た時、これは化けると予感した。

アテが審美にかなうものと出会うたからには、

世に出すため、どんなことでもする」

信春 「そこまで仰ってくださいとは」

利休 「お前の絵には運命を変える力があるということ」

信春 「運命…その言葉を昔、父からも」

利休 「それから、もう一つ」

信春 「何でございましょう」

利休 「三門にたずさわるに当たって、宗園和尚からお前に新たな名を」

信春 「新たな名」

利休 「長谷川等伯。師匠、等春禅師の一字と、上に立つ者という意味で伯の字を」

信春 「長谷川等伯…」

(手をつきお辞儀) 有難く頂戴致します」

利休 「天命が巡ってきたぞ、等伯」

信春 「天命」

利休 「天運といいかえてもいい。

運というものは、ひと時もじっと留まることなく世から世へと渡る。

取り逃せばそれまで。後で気づいても追いつかん。だが…」

信春 「はい…」

利休 「掴めば褒美はでかい」

等伯、利休を見つめて。

暗転。

桐文様の唐紙に「山水図」浮かび上がる。

崩壊の音。

(対屋事件)

狩野派弟子達、千々に乱れ登場。

永徳、激しく取り乱して登場。

弟子達にひどく乱暴をする。

声々 「ご棟梁。お許しを」

弟子1 「お止め下さい、ご棟梁。どうか、どうか」

永徳 「揃いも揃って、この役立たずが！

お前も、お前も！こうなるまで気がつかなんだか」

小頭 「申し訳ございません。しかし、こればかりは…」

弟子2 「すべての計画が極めて内密に行われ、我々にはどうにも…」

永徳 「我に口答えをするか」

弟子2 「滅相もない。ご棟梁、お許しを」

小頭 「どうか、若」

永徳 「太閤殿下が後陽成天皇、御譲位のため、

御寝殿の増築を決められたということは、真先に我が家へ使いが来るのが習わし。

それが狩野家を素通りして、宮中の御用に新参者がまかり入ろうとは。

しかも、長谷川なる町の絵屋ごときにその座を」

弟子1 「確かに、異例づくめにございますが」

永徳 「よいか、この話、何としてでも潰してこい」

小頭 「しかし、このお話は京都所司代様より直々のお申し入れとのこと」

弟子1 「所司代は普請奉行、前田玄以様で」

小頭 「あの方は僧侶の出。大徳寺ともご懇意」

弟子1 「おそらく利休様のお力添えが」

永徳 「それがどうした。太閤のお気に入りなら黙って見過ごせと」

小頭 「そうは申しません、申しませんが」

永徳 「茶坊主など関係ない。阻止する」

弟子1 「しかし、すでに下絵のお伺いまで進んでおるとか」

永徳 「それらを見過ごして来たお前達は皆、間抜けという他ない」

小頭 「平に平にご容赦。ですが、若」

弟子2 「ただ、ご依頼と申しても此度は仙洞御所の対屋^{たいのや}。

奥方様のお休みになる、ひと間だけの発注でございますから」

永徳 「対屋のひと間だけ…今、そうぬかしたか」

弟子2 「はい…いえ、私はただ」

永徳 「(つかみかかると)ただ何だ、言うてみい」

弟子1 「お止め下さい、ご棟梁」

永徳 「触るな」

小頭 「若」

永徳 「狩野家はただの絵師にあらず。

代々、その地位を勝ち取ってきた御用絵師の一族。
宮中は御用絵師の聖域ぞ！

これを黙って見過ごせば、やがて狩野の家は崩壊する。
お前らが今日、城や御殿に出入り出来るのは当たり前のことではないのだぞ。
並の画しか描けぬお前らが得意げに絵師などと名乗っておられるのは誰のお蔭か。
すべて狩野家の名があったればこそ。それ以外に何がある！」

小頭 「もちろんそれは…」

弟子1 「重々わきまえております…」

永徳 「御用を司るということを軽く見て、その座を譲ればどんな末路をたどるか。
それも分からんこのうつけ共。かくなる上は一斉に破門としてくれる」

小頭 「若」

弟子1 「ご棟梁、どうかそれだけは」

弟子2 「何卒、お許し、お許しを」

弟子1 「どんな仕打ちもお受けします。ですから破門だけは」

永徳 「それが嫌なら、どこへでも行って掛け合ってこい。

このまま何も出来ぬというなら、皆で河原者に落ちぶれるがいい」

小頭 「お待ちください、若」

弟子2 「ご棟梁、ご棟梁」

松栄、杖をつきながら登場。

傍で弟子3、4に支えられている。

松栄 「永徳、落ち着け」

永徳 「父上。ここは黙っていて頂きましょう」

松栄 「棟梁たるものいかなる時も穏やかに構えんと。

無慈悲な言葉は慎め」

永徳 「そのように悠長なことを申しておる場合では」

松栄 「手はまだある。早まるな」

永徳 「何です。手というのは」

松栄 「朝廷の御用には公家の意見が物を言う。

此度は宮中の御目付け、大納言様辺りが役目であろう。

すぐに出向いてお伺いを」

永徳 「大納言。あのお方には何度も御用を受け賜ったことがある」

松栄 「帝のご母堂は、あの方の血筋。

いくら所司代でも、そこまでは手が出まい。

お手持ちの用意を忘れるなよ。

扇と、それに極上の樽を用意して。ご当主は部類の酒好きじゃ

永徳 「今ある最高の扇をすぐに持て。五本、いや十本」

小頭 「ただ今」

弟子達、一斉に退場。

松栄、腰を下ろす。

松栄 「ここへ」

永徳 「すぐに行かねばなりませんから」

松栄 「少しは心静まったか」

永徳 「実際、落ち着くことなど」

松栄 「心乱れるのは、御用のせいかな」

永徳 「どういう意味です」

松栄 「以前、聚楽第であの男の絵を見た時から、この日が来るのを恐れていたな」

永徳 「あの男」

松栄 「長谷川等伯。大徳寺の三門を見事に仕上げた」

永徳 「ああ、あの絵屋」

松栄 「見物人の波に紛れて、お前も見に行ったそうだな」

永徳 「…」

松栄 「家の者が見かけたらしい」

永徳 「だから、何です…いけませんか」

松栄 「いいや。それでいいのだ。」

良い絵を描くのは自分ばかりでないこと。それを知ることはお前のためでもある。

お前にはそういう自分を受け入れることが必要なだよ」

「…」

永徳 「ずっとワシを見下して来たな」

松栄 「そんな…」

松栄 「隠さずとも、親ならそれくらい。それにな、確かにワシの絵はお前に劣る。」

父の跡を継ぎ、世間から地味松栄と陰口を叩かれていたことも知っている。

そういう中を、これまで生きてきた」

「…」

松栄 「ワシは元々、三男の生まれなのでな。」

父上からは期待もされず、絵の手ほどきもなかった。

それが、上の兄が亡くなり、次の兄も他所へ養子に出ていたり、

どういふわけかワシがこの家を引き継ぐ運命に。

自分の絵を見れば、自ずと先は知れる。

それくらい目はある。

だからこそ、お前の幼い頃の絵には驚愕した。

父上がよくお前を神童と褒めちぎっていたのも、内心認めていた。

お前は誰よりも修練し、寸暇を惜しんで磨きをかけた。

そして、新たな様式まで打ち出した。

ワシはお前の親であり、鼻根でもある。

早々に家督を譲ることにしたのはそのためだ。

お前が、安土へ移ると言い出した時には本気で止めた。

この世からお前の才覚をなくしてはいかんと思ったからだ」

「…」

永徳 「信長公が亡くなり、太閤秀吉の大坂城、聚楽第、

公家や大名に至るまで、名だたる御用をすべてお前は手に入れた。」

しかしな、永徳、

お前には心というものが大きく欠ける。情けや機微というものが。それを、お前も気づいているのだろう。

お前が等伯の絵に心留めるのはそのため。

自分が気づかぬものを、あの男は描いて見せている。

それがどういふものかは未だ分からぬらしいが」

永徳
「父上……」

松栄 「ワシも今回の台頭は許してはならんと思う。

それが御用絵師を預かる誇りと意地だ。

狩野がこれから先、在り続けるには、今、この時は重要な分かれ目となるろう。

ただな、これだけはよう憶えておけ。

天上の先に手を伸ばしても、日や星はつかめん。ましてや神の領域など。

お前は所詮、人なのだ」

永徳 「（じつと見つめている）……」

松栄 「ほう、初めて見るな、お前のそのような顔」

永徳 「そうかもしれない……」

松栄 「生き急いで何になる。

お前はまだまだこれから長い」

永徳
「父上……」

松栄 「実際、魔物よ……御用絵師というものは。

あの等伯にしても、これからその魔力にやられる。

それをどう乗り越えるか。

すべてはその者の器量次第」

暗転。

崩壊の音。

（長谷川家屋敷）

パネル（白地、墨なし）が下がっている。

その前で、うなだれる等伯の姿。

傍に投げ捨てられた手紙が見える。

ややあって、浄が日通を伴い、登場。

日通
「等伯殿」

浄 「知らせがあつてから、ずっとこの様子で。

（等伯に）少しは何か召し上がっては」

等伯
「……」

日通 「事情はおおよそ伺った。

今、久蔵と宗宅に事情を聴きにやっておるそうだから」

等伯 「（低く）これ程……馬鹿にした話が。」

こんな簡単な文一つで、大事な御用がお取消しになるなど…」

「確かに随分と急な話だが。そう気落ちをなさらず」

「この絵のどこが…。下絵の許しは得たではないか」

「お前様に手落ちがあったわけでは。」

宮中には、私達の分からない、様々な事情がございますのでしよう」

「そんなもの。ワシが精魂込めて描いた絵と何の関わりが」

「そう仰らず。お話があっただけでも、これは大変な名誉」

「そなたの腕前は、今やたくさんの方が認めておる」

「そうですね。元の絵屋に戻っただけのこと。」

都に出て来た時のことを思い出して御覧なさい。

今ではお店も大きくなり、食べるに困ることもなし。

子供や弟子達も皆、お前様を慕って。

七尾にいた頃より、余程よい暮らしかもしれません。

十分ではありませんか」

「何が十分なものか！

御用絵師こそ我が家の悲願。

長谷川家はもちろん、ひいては奥村の家さえも。

生き残ったのはワシ一人…皆がワシの絵に将来を託してくれた。

お前にはこの気持ちからんのか！」

「お前様…」

「都にいる名だたる絵師のさらに上をいく。

ワシはそれだけを胸に今日までやって来た。

御用絵師は絵描きの頂点…それが、すぐ手の届くところまで…それを」

「今のお前様は何かに憑りつかれているかのように。まるで別人です」

「憑りつかれてもいよう。」

実際、ワシは、何もかも呪ってやりたいくらいなのだ」

「そんな、恐ろしいこと」

「心を捨てることは、信心の道に外れまずぞ」

「これは、御仏からの天罰か…」

「等伯殿」

久蔵と宗宅、登場。

「父上」

「久蔵、宗宅。遅かったのね」

「申し訳ありません、母上」

「やはり、どちらへ伺っても詳しい話は聞けずじまい」

「そうなの」

「それでも、附け家老のお役目方から、経緯だけは」

「一体、どういう」

「それが…対屋の差し替え話は、この三日で決まったらしく」

「大納言様から、直轄である九条家へご依頼が渡り、

本日正式に命が下ったそうで」

浄 「たった三日……」

宗宅 「それも申し送りの知らせだけで」

久蔵 「朝廷からの申し出には逆らえんのでしよう」

浄 「普請奉行の方々は」

久蔵 「此度は、ただ堪えよと」

浄 「それだけ」

宗宅 「所司代、前田様のご家来衆は、いつかまた機会をやると」

浄 「一体、何があったというの」

等伯 「永徳だな」

日通 「え」

等伯 「狩野家の差し金だろう」

久蔵 「父上」

宗宅 「ご存知でしたか」

等伯 「それ以外に何がある！」

久蔵 「仰る通り……あの一室は、狩野派一門の手に渡り」

宗宅 「すべて、これまでの仕来たり通りに……」

等伯、恐ろしい形相で顔を上げる。

等伯 「久蔵、裏に手桶の用意を……。今日から禊を始める」

久蔵 「父上……」

宗宅 「何やら、いつもと様子が……」

等伯 「悔しい。心底悔しい……ワシの絵があつた男に負けるなど」

日通 「等伯殿」

等伯 「ワシは此度、絵を見せた。」

下絵と言えど、念入りに仕上げた会心の出来。

お前だつて見たはずだ、お前も！」

久蔵 「はい……」

宗宅 「見ました……」

等伯 「あの時、周りは一様に驚きの声を上げたほど。」

それが……手のひらを返したように、此度は相応しきにあらずと書いてよこした」

日通 「しかし、それは」

等伯 「ワシが忝に悔しいのは、ワシの絵でそれをひっくり返せなんだこと。」

この絵が満場の目を見張るものであれば、皆を留めることも出来たはず。

この絵にはその力が……。

ワシは今日という日を生涯、忘れはしない」

久蔵 「父上……」

浄 「お前様……」

等伯 「絵などいくらでも描いてやる。どこまでも御用の座を追い求めてな。」

狩野永徳……必ずこの雪辱晴らしてくれる」

等伯の気迫に一同、異様さを感じて。

暗転。
崩壊の音。

(東福寺 法堂)

弟子3 「パネルの隙間から、狩野派の弟子3、登場。
誰か来てくれ！」

弟子達が駆け込んでくる。

弟子2 「どうした」

弟子3 「ご棟梁が」

パネル、開く。

奥に高梯子が見える。

永徳、一人横たわっている。

傍で震える弟子の姿。

弟子達が前方に運び出て寝かす。

弟子2 「永徳様！」

弟子1 「ご棟梁！」

小頭 「(駆け込み) 下がれ、下がらんか」

弟子1 「どうしてこんなことに」

弟子3 「天井画の梯子から」

小頭 「足でも踏み外したか」

弟子2 「お前達がついていながら、どうして」

弟子4 「いいえ：それが」

弟子3 「ご棟梁は、気を失ってから落ちられた…」

小頭 「気を失って」

弟子4 「だから無理だと申したのです。ご棟梁は、このところすっかり疲れておいでに」

弟子3 「あまりに御用が多忙すぎたのだ」

弟子4 「この東福寺の仕事に就いたのも昨日の真夜中」

弟子3 「もう四、五日は一睡もしておらん」

弟子4 「それなのに誰にも御用を任せようとは」

弟子2 「おい！まだ息がある」

弟子1 「何！」

弟子3 「ご棟梁」

弟子1 「触るな。むやみに動かすんじゃない」

弟子2 「それよりすぐ医者を」

小頭 「待て」

弟子4 「何です」

小頭 「あれだけの高さから…。もはや助からん」

弟子1 「小頭」

小頭、永徳の顔に手をかざし振る。
永徳の反応はない。

弟子4 「しかし…」

小頭 「社寺絵所とはいえ、御用の途中でこの失態。
そのまま御上に伝われば、狩野の家もただではすまん」

弟子2 「どうするおつもりで」

小頭 「すぐに息を引きとる。しばらく捨ておけ」

弟子4 「（凍り付く）そんな…」

小頭 「今までこの人でなしに、どれほど屈辱を味わってきたことか」

一同 「（顔を見合す）…」

小頭 「この仲間であれば信用できる。そうだろ」

沈黙。

弟子1 「その話：乗った」

弟子2 「私も…」

小頭 「よし。夜になったら、屋敷へ運ぶ。

死んだのは帰る道すがら：そういうことに」

徐に永徳、最後の力。

天井に手を伸ばそうとしている。

弟子達、驚いて一瞬、後ずさり。

しばし、動かずそれをじっと見ている。

暗転。

崩壊の音。

（長谷川家 裏井戸）

舞台奥から、ぼそぼそと念仏の声、聞こえる。

提灯の明かり。

久蔵、登場。

久蔵、パネルを開く。

井戸で禊の水行（空の桶のみ）する等伯の姿。

等伯 「誰だ」

久蔵 「父上」

等伯 「禊の最中は誰も近づくなと固く申し伝えて」

久蔵 「それが：表に日通様の使いの方が」

等伯 「こんな時間に」

久蔵 「実は、狩野家のご棟梁が」

等伯 「永徳が。どうした」

久蔵 「亡くなりました」

等伯 「（驚いて）…」

久蔵 「何でも急な胸の発作ということで、今からご葬儀を」

等伯 「永徳が：死んだ」

久蔵 「絵屋の旦那衆も集まりだしております。どうします。一応、ご挨拶だけでも」

等伯 「お前達に任せよう」

久蔵 「ではすぐに」

久蔵、退場。

等伯 「永徳が：死んだ」

等伯、恐ろしげに桶を手放す。

等伯 「天命が動き出したか：」

照明、CHANGE。

甲高い能管の響き、殴り込む。

(利休切腹)

パネル、開くと奥に高座が見える。

雷のゴロゴロいう音、IN。

雨音、IN。

利休、白装束にて登場。

前後に検使役がついて先導。

利休と役人、高座の前に進む。

脇差の乗った三方を持った介錯人、登場。

傍に老僧の姿もある。

能面の男(翁面)、登場。

通路(簡略の橋掛かり)を進み行く。

利休 「放てば還る。じつとうかがい知るべし」

老僧 「後のことはご心配なく。すべて大徳寺がお引き受けを：利休居士」

介錯人、深くお辞儀。

利休、三方を自らの好みにずらす。

切腹の手順。

翁面、高座に到着し、正面を向く。

利休 「よう降りますなあ」

介錯人、刀を振り上げる。

その姿、ストップモーション。

パネル、閉じる。

照明、CHANGE。

能管の響き、続いている。

等伯、登場。

やがて手をつき、頭を下げる。

能面の子(童子面)、登場。

通路(簡略の橋掛かり)を進み行く。

奥のパネルが開き、高座で舞う翁面が見える。

童子面、翁面の舞を真似て戯れる。

突如、童子面、倒れる。

照明、CHANGE。

能管の響き、乱れ出す。

翁面の動き、変化。

激しく行き交う役人達、登場。

童子面、やがて役人達に運び出される。

烏帽子姿の所司代、登場。

所司代「上様ご嫡男、鶴松様お亡くなりにつき、

京の大仏殿傍に新たな寺をご建立。

長谷川等伯、並びにその一門。装飾絵一切の棟梁を命ずる」

等伯、目を見開いて前方を向く。

能管の音、高らかに響く。

翁面の姿、パネルが閉まるとともに消える。

能管、鼓の響き、OUT。

暗転。

崩壊の音。

(花街 茶屋)

にわか、聞こえ出す。

周囲から膳や酒器を持った祝い客、登場。

遊女達が賑やかに座を盛り上げる。

遊女達「そうら、奴さんだよ」

等伯、引つ張り上げられ踊り出す。

等伯「さあ、飲んだ飲んだ。今宵はとことんお酔いくださいませよう」

遊女達「そうら、そうら」

客1「長谷川のご棟梁、馬鹿に機嫌がいいな」

客2「何のお祝いです」

客3「御用の依頼が出たんだって」

客4「またかい」

客1「いや、今度こそは間違いねえ。太閤殿下、直々のご依頼だつてさ」

客2「太閤様、直々」

客3「そいつはすげえ」

客4「正真正銘の御用絵師というわけか」

遊女1「こりやもう、立派な旦那様ね」

遊女2 「そうら、旦那様」

客達 「旦那様、よいしょ。旦那様、よいしょ」

等伯 「春だあ。この世の春にございますう」

等伯を中心一同が戯けて踊る。

久蔵と日通、登場。

久蔵 「父上」

等伯 「おお、久蔵！話は耳に入ったか。ついに我が手に光が射したぞ。

いよいよ長谷川一門が御用絵師へ仲間入り。

我が家に鍾馗が舞い降りた」

日通 「等伯殿、久蔵が是非とも話をしたいと」

等伯 「（笑）心配するな。もう邪な手立ては誰も出来やせん。

こうなると、不思議なものだなあ。

次から次へと描きたい絵が浮かんできりがない」

久蔵 「そんなお話、一蹴しておしまいなさい」

等伯 「何……」

久蔵 「お断りをと申しておるのです」

等伯 「お前……何を」

にわか、鳴り止んでいく。

久蔵 「お忘れですか。あの関白殿下は、

ついこの間、我が家の大恩あるお方を葬り去ったのですよ」

等伯 「久蔵、皆様方の前で何という」

久蔵 「聞こえたって構いません！利休様はどうなるのです。我らのあの方への「恩義は」

等伯 「やめんか！」

祝い客がざわつく。

日通 「相すみませんがな皆の衆、今宵はここまで。ご挨拶はいずれあらためて」

等伯 「いや、お待ちください。祝いの席でとんだ不調法を」

久蔵 「父上！」

日通 「皆様方、ここは一先ず」

祝い客、遊女達が口々に話しながら帰って行く。

等伯、粗暴に座り、手酌で飲みだす。

等伯 「久蔵。お前、自分のしていることが分かっているのか」

久蔵 「もちろん。分かっているのは父上の方です」

等伯 「まだ言うか！」

日通 「まあ、二人とも落ち着かれよ」

久蔵 「そもそもこの話は、太閤殿下の風当たりを和らげるためのもの」

日通 「世間では鶴松様のお亡くなりだが、利休様の祟りであるともっぱらの評判だからな」

久蔵 「だからこそ、利休様に最も近い父上に、お慰みで白羽の矢を立てたのです」

等伯 「それがどうした」

久蔵 「それが……どうした」

等伯 「政はいつの世も謀り事。雲の上の話など、いちいちワシらの知るところでは」

久蔵 「私は政の話などしておりません」
等伯 「天下人から名指しで呼ばれたのだ。断る阿呆がどこにいる。これは頼まれごとではないぞ。御用御命じなのだ」
久蔵 「父上はいつからそんな墮落した考えを」
等伯 「無論、利休様のことを考えればワシとて辛い」
久蔵 「嘘だ。父上はこの時とばかりに喜んでおられる。我を忘れ、有頂天になっておられる」
等伯 「黙らんか！」
久蔵 「いいえ、黙りません。」
道を外れた父上にご意見を申し上げられるのは、身内でも私だけ。だからこそ、声を大きくして言うのです」
等伯 「利いた風な口を」
久蔵 「父上はご自分の夢のため、魂をお売りになるおつもりか」
日通 「等伯殿、私も一度、考え直されるべきだと」
久蔵 「思い出して御覧なさい。利休様の寂しいあのお最期。降りしきる雨の中で、ひとり逝かれた無念のお姿」
日通 「堺でのお見送りは、わずかにお弟子、二人だけ」
久蔵 「あれだけのご人物が、あのような寂しいお果てのなり方を」
日通 「そもそも、大徳寺の三門に利休像を置いた：ただそれだけのことで死罪など」
久蔵 「太閤が門をくぐる度その像から踏みつけにされるなど、そんな馬鹿げたこと」
日通 「他にも茶道具、器を高値で売りつけたとか、娘を側室に出さなからなど、どれ一つまともな話は」
久蔵 「しかも、さらされた場所は、悪霊の噂高い一条戻り橋：。問題になったあの像を、わざわざそこへ運び出し、その足元に、討たれた首を：。これが、血の通った人間の出来うる仕業ですか！」
日通 「確かに、あれだけ親密なおつき合いの太閤殿下と利休居士に、何があつたのか。未だに謎だらけだ」
等伯 「（唸るように）それが政：。だから、そう言っているではないか」
久蔵 「！」
等伯 「狂った齒車はもはや誰にも止められん。利休様は、それらをすべて承知の上、最後まで意を曲げなんだ」
日通 「それはそうかもしれないが：」
等伯 「ご信念。と、いうこと」
久蔵 「信念」
等伯 「最後まで己の生き筋を通され、美の様を貫かれた。極めるなら、命より大事にするもの。そこそこにある」
久蔵 「父上は、ご自身もそれにならうと仰るのですね。どうあっても、此度の話をお受けすると」

等伯 「そうだ。ワシは絵描き。ご依頼を受ければひたすら絵の事だけにまい進。

それが御用絵師というもの。断る気もない」

日通 「等伯殿」

等伯 「すでに構想も出来ておる。

大広間の中心にはワシとお前が描く四季折々の樹木を並べ、
華やかに浄土の世界を彩る。

描く数も今までとは桁違い、種類も多岐にわたる。

長谷川家の一門が絵出となって、それを描くのだ」

久蔵 「それほどまでに御用絵師にこだわりますか」

等伯 「ああ！こたわる」

久蔵 「結構。ならば私は家を出ます。

心を欠いたその姿、私はこれ以上見とうありません」

等伯 「（頬を叩きつける）このたわけが！」

日通 「等伯殿」

久蔵、倒れこみ、等伯を睨む。

久蔵 「今の父上は欲に取りつかれたさもない亡者……」

久蔵、足早に退場。

日通 「久蔵」

等伯 「追うな」

日通 「少しは気持ち察してやれんか」

等伯 「親にたて突くなら勘当だ。跡取りは弟の宗宅に変える」

日通 「何をそんな」

等伯 「本気だぞ。ワシはこの御用にすべてを懸けておる。

何があってもこの機会、手放すものか。

邪魔立てするなら、ワシは子でも捨てる」

日通 「等伯殿、あなたという人は……」

暗転。

崩壊の音。

（堺 妙国寺）

浄、一人の坊主に案内されて、登場。

坊主 「すぐに来られます。どうぞ、こちらで」

浄 「（包みを差し出し）それから、これは皆様方へ。

都では一寸した評判なのですが、お口に合いますかどうか」

坊主 「そのようなお気遣いなど。久蔵様はそれはよくお働きに。私共も大助かりで」

浄 「それはそれ。どうぞ、ご住職様に」

坊主 「左様でございますか。それではお渡しを」

浄 「ホンによく出来たお坊さんじゃ」

坊主 「お世辞を頂いても何も出ませんよ。悪しからず」

坊主、お辞儀して退場。

ややあつて、久蔵、登場。

浄 「春も終わるのねえ。桜がもう散り出した」

久蔵 「どうしてここが」

浄 「もちろん日通様からですよ。」

お口の堅いあの方に、弟達が熱心をお願いをしてね」

久蔵 「随分、遠かったでしょう」

浄 「まさか堺へ逃げ込んでいるとは。」

日通様が修行を積まれたこのお寺に」

久蔵 「父上と距離を置くには、都を出るのがよいだろうと」

浄 「少し痩せたのでは」

久蔵 「いいえ。かえってたくましゅうなつたくらい」

浄 「もうひと月になる。そろそろ頭も冷えたでしょう。お帰りなさい」

久蔵 「お断りします」

浄 「久蔵」

久蔵 「朝な夕なと経を読み、絵を描く毎日。

心が穏やかになっていくのが分かります。

私はこのまま、この堺で暮らしていこうかと」

浄 「なりません」

久蔵 「母上」

浄 「我が家は、絵師になるため命を懸けて都へ。

今更、お前が絵仏師になる必要など。

お前は今でも長谷川家の惣領」

久蔵 「私は父上の元に戻る気など。

人の情けを忘れ、何が天下の絵師ですか」

浄 「お前のそうやって、むきになった顔。若い頃の父上と似てきましたね」

久蔵 「やめてください」

浄 「まだ能登の七尾にいた頃、

お前のおじい様から都に出ることを反対されたことがある。

絵の修行のため、何度か都へ行き来を許されていたので、

どうにもそのままにいる我慢が出来なかったのです。

ただ、その頃は、絵仏師としても道半ば、おじい様もお許しには。

その時のくやしそうな顔、今のお前とそっくり」

久蔵 「…」

浄 「けれど、それから数年経って、能登が戦に巻き込まれた時…。

町が焼かれて、長谷川の家もお店ごと失くし、番頭や女中も皆散り散りに。

どうにか逃げ延びて、菩提寺の境内で寒さをしのぐも、

逃げ延びた周りの人達も次々と病に倒れ、

そのうち、おじい様とおば様までかかっておしまい。

すっかり弱った体で、父上にこう言われた。
都へ。お前の腕なら御用の絵師も夢ではない」

久蔵

「…」

浄

「父上は断りましたよ。

何があってもお店を再興すると。

自分は長谷川家の跡取りだから、と言ってね」

久蔵

「…」

浄

「けれど、おばあ様から最後に。

元を正せばそのことを、奥村家のお父上から頼まれたのだと」

久蔵

「奥村の」

浄

「それで決心をしたのです。

父上の夢は、自分だけの夢ではない」

久蔵

「七尾のことなら：私にもおぼろげな記憶が。

おじじとおば様様が亡くなって、故郷を離れる朝、

松林が続く長い浜辺を三人で歩いた。

あの時の父上の横顔を今でも思い出します。

しっかりと握られた手の温もり。

見知らぬ土地へ旅立つことなど、私はちっとも怖くなかった」

浄

「七尾を離れて、命からがら本法寺へたどり着いたあの日。

遠い夢のよう。あれから辛抱に辛抱を重ね、ようやくここまで」

久蔵

「ですが：私は今の父上の姿を」

浄

「利休様のことならお前の誤解ですよ。

義理堅い父上が、あの方をなおざりにするなど」

久蔵

「しかし：」

浄

「奥の寝所をお前は知らない」

久蔵

「ご寝所」

浄

「あそこには絵所とは別に、ご自身だけの絵が置いてある。

写しや試作、写生の数々。その中に利休様の姿絵も」

久蔵

「利休様の…」

浄

「何枚も何枚も細かく描き直したものがね。

あれだけの数を描き直したもの、他には。

いつか時がくれば、清書なさるおつもりでしょう。

それまでは、朝晩、その絵にお手を合わせるだけ」

久蔵

「…」

浄

「父上は何も変わっていませんよ。そういう心の在り様だけは。

豪傑に見えて実は細やかな気持ちの持ち主。

今、一人で重圧に耐えているのです」

久蔵

「父上が、そんな…」

浄

「絵というものは見えぬものまで描くのでしよう。

風や音、喜びや悲しみ、永遠に生きる命さえ。

久蔵、人を変えたければ、まず自分がお変わりなさい。
目の前の見え方が変われば、遠くの景色まで違っていく。
まったく違う世界へたどり着く」

「…」

「確かにあの人は今、
新しい世界のあまりの眩しさに、自分を見失っているかもしれない。
それでも、必ずいつかは気づくはず。それを補うのは家族皆の務めです。
見捨てることなど長谷川の家にはありません」

「…」

奥のパネルがにわかに動き出す。

久蔵 「何です」

浄 「外をご覧なさい」

久蔵、進み出る。

動いたパネルから弟達が姿を現す。

久蔵 「宗宅、宗也、左近」

弟達、口々に「兄者」「お元気か」「一緒に帰りましょう！」

久蔵 「お前達」

浄 「宗宅は一度、様子を見に来ているのですよ」

久蔵 「宗宅が」

「日通様から居所を聞いて、一人。」

お前を迎えに来るだけならもつと前でも。

描き始めた下絵があまりに見事だったので、私にだけはそのことを」

「下絵」

浄 「お前を今日まで置いていたのは、せめてその下絵が仕上がるのを待って。

宗宅の願いです。

桜の絵。そうでしたね」

久蔵 「しかし、仕上がったことを何故…。住職か」

浄 「先程のお坊さんが本法寺に文を届けてくれた」

久蔵 「あの悪しからず坊主が」

宗宅 「母上…」

左近 「お話は…」

宗也 「兄者はお戻りか…」

浄 「さあ、船にその下絵を乗せて。丁寧だね」

弟達、口々に「やったー」「それ急げ」「ほら、そっちを動かせ」

久蔵 「母上」

浄 「もう嫌とは言わせませんよ」

櫓を持った船頭が、坊主に連れられ、舞台前方へ登場。

のどかな船頭歌。

その周りに浄と久蔵が座する。

弟達がパネルを動かして乗船の位置に配置。

坊主もそれを手伝う。

船頭、櫓を漕いで船を進める格好。

坊主、手を振り、退場。

等伯と弟子達、登場。

弟子達、パネルを祥雲寺絵所の形に配置していく。

やがて、それぞれの持ち場に座し、絵筆を動かす。（白地墨なし）

船頭、動きを終えると、久蔵達が立ち上がる。

船頭、退場。

弟達、久蔵のパネルを中央に配置する。

浄 「只今、戻りました」

等伯 「（立ち上がる）…」

久蔵 「父上…」

久蔵、頭を下げる。

等伯 「（久蔵の顔つきでじっと見つめる。

間。

等伯 「筆を入れてみい」

久蔵 「はい」

久蔵、等伯の元に。

等伯も自分のパネルへ絵筆を入れていく。（白地、墨なし）

等伯と久蔵、並んで描く親子の背中。

浄、弟子達に手招きして退場。

弟と弟子達、後に続く。

暗転。

「櫻図」、鮮やかに浮かび上がる。

照明、CHANGE。

（祥雲寺障壁画 依頼）

等伯と久蔵、手をついて深々と頭を下げている。

所司代、役人数名を伴い、登場。

所司代 「此度、上様におかれては、朝鮮出兵に伴い、

その拠点として、九州に新たな城を築かれた。

装飾絵一切は、狩野家の新棟梁、永徳の嫡男が仕切っておる」

等伯 「永徳様の…」

所司代 「長谷川等伯、並びにその一門。

鶴松様三回忌法要に向け、祥雲寺御用での働きぶりはすこぶる祝着。

特に嫡男、久蔵の障壁に描きたる「櫻図」は、目を見張る」

等伯 「有難き幸せ」

所司代 「その評判、九州の上様にも届いておるぞ。」

早速、装飾の一員に命が下った」

久蔵 「私が新たな城の御用を」

所司代 「実際、永徳亡き後、狩野家はこれまでのように立ち行かん。

出来も今一つ、確かな腕の者なら一人でも欲しい」

等伯 「城の御用は絵師としてこの上ない誉れ。謹んでお引き受け致します」

久蔵 「しかし、残りの御用がまだ…」

等伯 「狩野と肩を並べる千載一遇の好機、この機会を逃す気か…！」

久蔵 「父上」

等伯 「心配ご無用。すぐさま此奴を九州へ」

所司代 「ならば安心。早速、支度を整えよ」

久蔵 「直ちに」

所司代 「御用の絵師と相成ったからは、このように次から次へ仰せをつかる。

ワシも年がら年中大忙しだ」

等伯 「お察し致します」

所司代 「等伯、今や長谷川一門も、狩野の家をしのぐ勢いよの（笑）」

所司代、役人を伴い退場。

照明、CHANGE。

浄、兄弟達が登場し、久蔵を取り囲む。

皆が口々に「久蔵」「兄者」。

旅荷物を背負った弟子もいる。

弟子、久蔵の荷物を手渡す。

宗宅 「急ごしらえで大した用意も」

久蔵 「何、御用の絵所なら何でも揃っているはず」

浄 「いきなりのお話でいささか心配。

狩野の人達が黙っておるのでしようか」

等伯 「たわいもない。今や狩野の家と我らは対等、大きな顔で行ってこい」

久蔵 「母上、ご心配なく」

左近 「こちらの御用が済み次第、我らもお手伝いに」

久蔵 「おお、待ってるぞ」

浄 「お前様、どうしました」

等伯 「（寒気）いや…」

久蔵 「父上、こちらの御用もいよいよ大詰め。どうか心置きなく」

等伯 「む」

久蔵 「それでは父上、母上、行って参ります」

久蔵、伴の弟子を引き連れ、退場。

宗宅達、声を掛けながら見送りに続く。

浄 「お寒いですか。何だか、体が震えているよう」

等伯 「そんなことは」

浄 「このところ眠れていないのでは」

等伯 「心配するな。大広間の襖絵が済めばこの御用は終わる。

そうら、見送りに行った。

今は一人、静かに絵所へ向かいたい」

浄 「そうですか…では」

浄、退場。

等伯、ゾクとした震え。

奥のパネルに向かう。

照明、CHANGE。

(楓図屏風)

崩壊の音。

等伯 「ずっと、この時を待っていたはず。

御用絵師。

今や狩野の家と我らは対等。

(震え) 身震いではない。身震いではないぞ。

これから描く絵の姿が、ワシにはもう見えている。

それがどういいうわけか、

静めようとすればするほど落ち着かん。

何やら始終ざわついて耳の奥が静まらん。

(震え) 身震いではない。

この暗闇は何か。

絵筆が入る紙を目の前に、煩い影がちらつく。

(等伯、絵筆を取って床中に描き始める。(墨なし))

違う、これも違う、これも…

自分の思い描いている線がまるで出てこない。

(自分の目の前に手をかざし) 今、ここに見えているのに。

どの線も、ここに見える絵とまるで違う。

違う、これも違う…。

体が重くていうことをきかん。

(震え) ええい、煩わしい。

待てよ、この線。

これか。

そうだ、これも、こいつも。

この線は根に、この線は幹に、そうだ。

これこそが秋の図、楓の姿」

パネルの陰から永徳の亡霊、登場。

永徳 「おい、泥棒。それは我の絵そのものではないか」

等伯 「(動きが止まる)…」

永徳 「この大木の配置、筆づかい、どこもかしこも私の写し」
等伯 「永徳。いつも感じていた、お前がそこにおることを」
永徳 「どの線を見ても私の痕跡。」

誰も彼も皆、私の真似をする。

かいほくゆうしよう 海北友松、うんごくとうがん 雲谷等顔、そがちくあん 曾我直庵。

今いるどの絵描きも私の絵に惹かれて、私の跡をたどる。
その中でもお前が筆頭、性質の悪い。

なあ、長谷川等伯（不敵な笑）」

「何がおかしい」

永徳 「狩野家が御用の座を譲ったって。」

とるに足らない絵仏師出の一門に」

「（再び描き始める）どけ。ワシはこの絵を仕上げねばならん」

「焦るな、何も浮かんでおるまい。だから模倣する。」

ほうらまた。それも、その筆づかいも、皆、私の真似だ」

「そんなこと。この筆は今や定石、誰もが表す墨の置き方」

「しかも、線が堅い。さばきに無駄が多すぎる。」

神経が過敏となつて、指先が自在に動かん証拠。それに、その震え」

「（震え）煩い」

「（笑）我が背負うた重みを今ごろ、感じたか」

「憑りついて殺すか。呪わば呪え、

ワシこそ何度でも、呪い返してくれる」

「我が何をした。お前の手足を押さえたとしても。

人のせいにするなよ。」

所詮、お前はその程度。お前の力は御用絵師に値せず」

「ワシがどれだけの思いでここへたどり着いたか」

「この腕前では千年描いても私の域に及ばず」

「域」

「天上の領域。」

お前に御用絵師の何が分かる」

「…」

「天上の絵師というものは、並みいる絵師の上に立つ。

いつもたった一人、

万人の視線と期待を背負いながら、

我自身が妥協一切を許せなくなる。

常に新しく、常に大胆に、

自問自答を繰り返し、

瞳の奥に映るその絵だけを信じ、

延々と絵筆を動かし続ける」

「（震え）…」

等伯

永徳

「膨大な数をわずかな工期で、
ひたすら一面一隻に向き合い、
それが終われば別の御用。

ずらりと並ぶ紙の前で、
また一からひらめきを生み出す。

その数は限りなく、無間地獄の渦におぼれたかのよう。
そうら、また線が乱れた」

等伯

「(震え) 来るな」

永徳

「これからお前は、その流れに生涯追われていく」

等伯

「覚悟ならワシにも出来ている」

永徳

「覚悟。それなら、そのお前の震えは何だ」

等伯

「(震え) 黙れ」

永徳

「正直に言ってみろ。

お前は私の絵に怯えている。

憧れと敗北の両方を持ち続けて、

田舎絵師の影を引きずる」

等伯

「ああそうとも！ワシはお前の絵に惹かれている。

叶わないと思う瞬間を、今も抱き続けて描いている」

永徳

「どうとう認めた」

等伯

「しかし、それでも…。

それでもワシにはワシにしか描けぬものを。

そういう線を一本でも」

永徳

「お前には描けんよ、ここから上の絵というものは。

天上の絵は、何かを捨てねば決して。

我は我自身を捨てた。

命縮めても尚、最高の絵を追い続けた。

死などいといはしない。

だからこそ私の絵は美しい」

等伯、静かに硯に向かう。

等伯

「(低く) 絵はまるで生き物。

時代の流れと共に移りいく。

日々、新たな趣向が生まれ、古いものは廃れいく」

永徳

「並の絵描きが口ごたえか」

等伯

「お前の絵は…」

等伯、再び描き始める。

一つ一つの動き、力強く。

等伯

「お前の絵は、太くて強気の線一本やり。

これでもかど力で押し切るその様は、

思い上がりが充滿して辟易する」

永徳

「私の絵にケチをつけるか」

等伯 「お前の絵は、いつも大画様式。

中心に巨大な主題を置いて豪快にみせては来たが、
今や、印象を強くするだけのその姿はあざとく、退屈」

永徳 「退屈」

等伯 「繊細さにも欠ける」

力がこもり、描く速さが増していく。

等伯 「ワシはお前と違う。

絵の筋も違う。

感じるものも、歩んできた道のりも。

別の人間であり、別の表現をする。

見てみる、お前にこの線が出せたか。

この墨、この色、この新しい線を」

永徳 「我ならその線は右へ。

枝ぶりを延ばし、左右に拡がりを持たせる」

等伯 「ならばワシは左。

流れる川の奥行こそ、この絵の主題映えたる」

永徳 「根こそ力の根源。最も濃い墨で勢いを強調する」

等伯 「根には下草の繊細な線。

色とりどり華麗に、小さきものへの眼差し」

永徳 「お前、ことごとく我に逆らうか」

等伯 「呪いたければ殺せ、この命くれてやる。

ただし、この絵だけは、こいつだけは邪魔立てさせんぞ。

ワシのこの腕、この指先から生まれるひと筆。

ここから先はワシの領域。

これが長谷川等伯。

どうだ」

奥のパネルに「楓図」、絢爛に映し出される。

永徳、静かに眺めて歩く。

やがて、足を止めて。

永徳 「これが、次の時代」

等伯 「…」

永徳 「幾夜も徹して描き終えた絵を後に、

明け昇る陽の光にもうろうとした。

確実に命が尽きていくのを感じながら、

それでも考えるのは、

新たに描く次の絵のことばかり。

あれだけ心血を注いで描いても、

そのほとんどが政で無に消えた。

御用絵とはそういうもの。

何度、自分に言い聞かせてきたことか。

それでも我は千年先に残る絵を描いた。
私の絵が廃れるものか」

等伯 「永徳、お前の目にこの絵はどう映る」
間。

永徳 「我に勝る絵描きが出たれば本望。
それがもし、お前なら。

なあ、長谷川等伯」

永徳、静かに去り行く。

等伯、倒れる。

照明、CHANGE。

(久蔵の死)

宗也、左近、日通、登場。

一同 「父上！父上！」

等伯 「(気がついて)ワシの絵は……」

等伯、振り返り絵を確かめる。

等伯 「どうとう出来た……新たな絵が」

一同 「……」

等伯 「(立ち上がり) 見てみる、これがワシの楓図」

一同、うつむいたまま。

等伯 「どうした」

宗也 「父上……」

左近 「九州より知らせが……」

等伯 「九州」

宗也 「久蔵兄者が……お亡くなりを」

間。

等伯 「今……何と」

日通 「等伯殿、久蔵が亡くなったのだ」

宗也 「九州でお倒れになり」

左近 「そのまま息を」

日通 「すでに亡骸はあちらで火葬に」

等伯 「何が……何が、起こったと」

宗也 「形見を持ち帰った弟子達の話では……狩野家の者達は、それは嫉妬深く」

左近 「事あるごとに絵師同士の衝突を繰り返していたそうで」

宗也 「兄者の心労はいちじるしく」

左近 「詳細は分かりませんが、争いに巻き込まれたことだけは確か」

宗也 「中でも原因を作ったとされる四人の弟子が捕らえられ、ご成敗されたとのこと」

左近 「所司代様からは、これにて落着くようにとのことお達しが」

宗也 「こんな事なら、九州へなど」

左近 「我々は、とんでもない所に兄者を送り出してしまった」

等伯 「久蔵が：久蔵が：」

等伯、思い立ったようにパネルに向かう。

取り乱した様子でパネルの周囲を次々に探す。

日通 「等伯殿」

等伯 「(宙を見つめ) 永徳：お前か！」

宗也 「父上」

等伯 「(駆け回って探す) 永徳：永徳が！」

左近 「父上」

等伯 「お前らも探せ！」

この辺りのどこかに永徳が。

これは、あの男の仕業、ワシの身代わりに久蔵を。

探せ！ほら、探さんか。

見つけたら首根っこ捕まえて引きずり出せ。

どうした、お前達！」

日通 「永徳などおらん。狩野永徳はもう死んだ」

等伯 「会うたのだ、この絵の出来る間中ずっと！」

日通 「ワシの周りをうろついて：ワシと語り、向き合った」

等伯殿、いつまであの男に執着を。

盲目にさまよい、それでもまだ、ありもせん影を追い続けるおつもりか」

等伯 「影：」

日通 「まだ気づかんのか！」

そなたが向き合うて来たのは、永徳の姿を借りたそなた自身」

等伯 「：」

日通 「すべては幻影だ、等伯殿」

等伯、膝をついて遠くを見据える。

宗也 「兄者は、城に着くとすぐにひと間を任せられ、

見事な彩画を描ききったそうです」

左近 「その夜、にわかには苦しみ出し、倒れた後は一度も目を覚ますことなく」

宗也 「さあ：兄者の元へ参りましょう」

左近 「母上と宗宅兄者が葬儀の支度を」

等伯、固まったまま全く動かず。

長き間。

宗也 「(等伯の様子に不安) 父上：」

日通 「等伯殿：」

等伯 「(絶叫) 久ー蔵オオオオー」

崩壊の音。

照明、CHANGE。

念仏の声、殴り込む。

等伯と日通のみ残る。

(祥雲寺)

暗闇に浮かび上がる、眩しいほどの輝く絵。

「楓図」の前を、翁面を先頭に、所司代、

持ちリンを持った法要参列の僧侶達が横切る。

参列 「阿ーーーーー……」

参列 「咩ーーーーー……」

舞台手前に等伯、立ち尽くしている。

日通、その傍に寄り添う。

等伯 「あの声は……」

日通 「般若心経だよ。鶴松様のご法要が始まった」

等伯 「ワシにはあの念仏が……阿咩、阿咩と聞こえる」

日通 「阿咩……」

等伯 「この世は常に始まりと終わり」

日通 「始まりと終わり……」

間。

等伯 「還ってきた……すべて自分の元に。」

これまで生んだ業の深さ……罪……毒が。

すべて自分に」

日通 「いつかこういう日が来ることを、

随分前から分かっていたような気がする。

私は忠告すべきだった。ずっと傍にいた者として」

等伯 「心の闇に背中を押され、弓弾いた矢が、

結局はこの胸をめぐり取って行った」

日通 「長年の願いが成就し、ようやく一門が世に出たというのに。

長谷川等伯。今や都で、そなたの絵を知らぬ者はおらんだろう」

等伯 「しかし、それで何が残った……」

たった一人の男にとられた人生。

嫉妬と野心であの男の影を追い求めた。

狩野永徳。ワシにとつてあの男は、あまりに大きな存在」

日通 「生まれながら世の誉れを一身に受け、いつも目の前に立ちふさがった」

等伯 「あの男を越えたかった。あの男の座を奪いたかった」

日通 「そして、最も大切なものを失った」

等伯 「そうだ……」

人の道を外れ、阿鼻の世界へ行き着いたこの身は、今や無残な抜け殻。

もう何も無い。夢にまで見たこの絵を描き上げても、

今となつてはさもしく映るだけ」

日通 「誰がこの見事な絵の裏側に、そのような苦悩を見い出せるか」
等伯 「零れ落ちていく…この手から最も愛しいものが」

日通殿、これが御仏の天罰か。

ここまで責め苦をする地獄がどこにある」

日通 「御仏は絶えず智慧の光を照らす。今はただ、無明の苦しみと知ること」
等伯 「この金碧の輝き。」

ワシは今まで何を望んで来たのか…。

忘れたはずの過去が蘇り、堂々を巡る。

いつからか、自分の求める道に狂いが生じていたのは」

「この絵にたどり着くまで、すべては長い道のり」

日通 「そう、長くて遠い」

等伯 「あまりにも多くのことが通り過ぎて行った」

日通 「ワシは一体、何を求めて…何を」

等伯 「そもそも始まりは」

日通 「能登、七尾。あの日の朝霧。」

旅立ちの時からここへ至るまで、

多くの者が死に、別れ、栄華と苦悩を繰り返した。

あれは幻か…いや、確かに過ぎ去った自分の人生。

愚かな…あまりにも愚かすぎる。

まるで間違いをするために生きて来たかのように」

日通 「人は誰しも間違いの道を行く。」

時として我に返り、その恐ろしさに気づく」

等伯 「御仏よ、今からでも遅くない。」

どうかワシを身代わりにしてくれ。

あの子の代わりになれるなら、どんなことでも」

日通 「（等伯の肩に手を置き）亡くなった者はそれを望んではいけない」
等伯 「そうだろうか」

日通 「ああ。涅槃へ旅立つ者は、たとえどんな最期であったとしても現世を全うした。

満足も不満足もない、ただ受け入れるだけ」

等伯 「全くもって馬鹿げた話だ…」

暗転。

静かな海の音、I N。

（松林図屏風）

朝霧の浜。

等伯、一人で立ち尽くしている。

ややあって、浄、旅の様相にて登場。

浄 「やはりここでしたか…」

等伯 「お前、どうして」
浄 「何も言わぬまま何日も帰らず。
皆であちこちを探しましたが、
最後にはきつと、ここに違いない…そう思つて」
等伯 「心配をかけた」
浄 「実は私も見たくなっておりました…この七尾の海を」
等伯 「お前も。そうか…」
浄 「(等伯の羽織を出して肩にかけてやる) こんな、着の身着のまま」
等伯 「この景色を、どうしても見ておきたくて」
浄 「でも、よかつた。もしここでなかつたら」
等伯 「長いこと戻らなだからな」
浄 「ええ。あれから一度も。」
等伯 「久蔵はこの浜のことを憶えていましたよ」
浄 「久蔵が」
等伯 「七尾を出る時、三人で歩いた日のことを。
遠い遠い日のこと」
浄 「ここは何ひとつ変わらん。久蔵がいたあの頃も、
それよりもっともつと前から」
等伯 「本当に。まるで、世の中が動いていなかったかのよう」
浄 「これから先、何を描くか。」
等伯 「ここへ来れば、分かる気がした」
浄 「(冊子を取り出す) これを、日通上人から」
等伯 「何だ」
浄 「お前様のこれまでをつぶさに記してある。
今ならこれが役に立つかも」
等伯 「驚いたな。まだ続けていたとは」
浄 「絵のこと、思想のこと、細かく色々書いてございます」
等伯 「等伯画説か。表題までご大層に」
浄 「それをどのようにするかは、お前様にお任せすると」
等伯 「上人の好きにするさ。」
浄 「ただ、狩野永徳に関わるものがあれば、すべて破り捨てよう」
等伯 「あなたの人生にあの方の記載がないのは、不自然なのは」
浄 「それでも、自分の中からあの男を完全に昇華させたい。
もし、ワシの絵が、百年残るか、千年残るか。」
浄 「その時、この書物が一緒に誰かの目に触れるとするなら、尚更」
浄 「そうね。それがいいかも」
等伯 「新しい絵を描くよ、生まれ変わった気持ちで。
これまで関わったすべての者達へ、魂を鎮めるつもりでな」
浄 「そうですね。いいと思うわ」
二人、立ち去って行く。

ゆつくりと明かりが落ちていく。
奥のパネルに「松林図屏風」、浮かび上がる。
波の音、大きくなって。
完全暗転。

(七尾まだら)

(ハアーちよいと出た ゆるり出た 出先の浜から 白帆が二三ばい アーちよいと出た)
目出度 目出エーヨエー エーエー度のヨ

(イヤヨーエヨエー エヨエーエ エヨエヨエーヨエー)

若ー(松ーイヨホホイ コノイヤーアイ様 アーヨーエヨエヨ

エヨエヨエハーエーイヨホホイ アーヨイコノサー

イヨホホホーイ エーヨーホイサーエー)

イヤ枝ー(もーイヨホホイ コノイヤーアイ栄えるヨーエヨエー

エヨエヨエヨハーエーイヨホホイ アーヨイコノサー)

葉もしーイー(ハア)ヨーエーヨエー エヨエヨエーエサア げるヨイサーエー)

(幸若舞 敦盛 一部)

去るほどに、熊谷、よくよく見てあれば、菩提の心ぞ起こりける。

「今月十六日に、讃岐の八島を攻めらるるべしと、聞いてあり。

我も人も、憂き世に長らえてかかる物憂き目にも、また、直実や遇はずらめ。

思えば、この世は常の住処にあらず。草葉に置く白露、水に宿る月よりなおあやし。

金谷に花を詠じ、栄花は先立て、無常の風に誘はるる。

南楼の月をもてあそぶ輩も、つきに先立って、有為の雲に隠れり。

人間五十年、化天の内を比ぶれば、夢幻のごとくなり。

一度生を受け、滅せぬ物のあるべきか。

これを菩提の種と思ひ定めざらんは、口惜しかりき次第ぞ」と思ひ定め、

急ぎ都に上りつつ、敦盛の御首を見れば、物憂さに、

獄門よりも盗み取り、我が宿に帰り、御僧を供養し、無情の煙となし申。

御骨をつ取り首にかけ、昨日までも今日までも、

人に弱気を見せじと、力を添へし白真弓、

今は何にかせんとて、三つに切り折り、三本の卒塔婆と定め、浄土の橋に渡し、

宿を出でて、東山黒生房と申。

花の袂を黒染めの、十市の里の黒衣、今きて見るぞ由なき。

かくなる事も誰ゆへ、風にはもろき露の身と、消えにし人のためなれば、

恨みとは更に思はれず。